仙台市文化財調査報告書第117集

富沢遺跡

―― 第33次発掘調査報告書 ――

1988年3月

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第117集

富沢遺跡

――第33次発掘調査報告書――

１９８８年３月

仙台市教育委員会

序

日頃、仙台市の文化財保護行政に対しまして、多大の御協力をいただき、担当する仙台市教育委員会にとりましては、誠に感謝にたえません。

近年、富沢地区におきましては区画整理事業、高速鉄道建設が完了し、仙台市の南部の拠点となる副都心として位置付けられ、急速に開発・市街化が進んでいるところであります。こうした動きの中で、富沢遺跡は発掘調査が進むにつれて、縄文時代から近世にかけて、連綿と人間の生活の痕跡が残されていることが分かってまいりました。特に弥生時代以降の水田跡の解明や、それより古い縄文時代の人間生活の痕跡の発見、また、多賀城以前の官衙跡である郡山遺跡との関連などといった大きな成果が得られております。今回の調査におきましては、宮城県教育委員会の御協力をいただき、弥生時代から平安時代までの水田跡や、古くから「宮田」と「鳥居原」という字境をなしていたという水路が発見され、富沢遺跡を解明するための一助となる成果が得られております。こうした、文化遺産を市民の宝として、永く後世に継承していくことは、これからの「まちづくり」に欠かせない大切なことであります。今後とも市民各位の絶大な御協力を念願して序といたします。

1988年3月

仙台市教育委員会
教育長　藤井　黎

例　　言

1．本書は共同住宅（マンション）建設に伴なう富沢遺跡の第33次発掘調査報告書である。

2．調査の主体者は仙台市教育委員会であるが、発掘調査にあたって宮城県文化財保護課の応援をいただいた。（担当職員：斉藤吉弘）

3．15b層出土木製品の樹種に関してパリノサーベイ㈱高橋利彦氏に御教援いただいた。

4．本書の文章、実測図中の方位は真北で統一してある。

5．本書中の土色は「新版標準土色帖」（小山・竹原、1973）を使用した。

6．遺構平面図中に任意に単点を設けて標高を明示するようにしてある。

7．報告書作成のための整理、本文執筆、編集は主浜光朗が行ない、陶磁器の鑑定は佐藤洋が行なった。

8．本遺跡の位置と環境については、富沢遺跡第15次調査報告書『富沢―仙台市文化財調査報告書第98集』と重複するため本書では割愛した。そちらを参照していただきたい。

9．本調査における出土遺物、実測図、写真等の資料は、仙台市教育委員会で一括保管しているので活用されたい。

調　査　要　項

遺　跡　名　称：富沢遺跡（仙台市文化財登録番号C―301、宮城県遺跡登録番号01369）

所　　在　　地：仙台市長町南三丁目９－５

調　査　主　体：仙台市教育委員会

調　査　担　当：仙台市教育委員会文化財課調査係

（担当職員：主浜光朗）

調　査　期　間：自1987年８月25日　至1987年10月31日

調査対象面積：約744㎡（発掘面積約255㎡）

調査参加者：大槻明美、小沼ちえ子、佐藤敏幸、佐野弘（以上整理も含む）

赤川千広、阿部いしよ、阿部孝一、阿部清太郎、阿部すえ子、阿部美代寿、阿部みのる、壱岐豊子、岩井レイ子、小川良子、菊地芳郎、黒田ふさ子、今野淑子、笹川光夫、佐藤幸子、佐藤朋弘、鈴木つや子、高橋とみ子、高山宣子、冨田美由紀、早坂みつえ

調　査　協　力：住友不動産株式会社、フジタ工業㈱

本 文 目 次

序

例言

調査要項

Ⅰ．調査に至る経過……1

Ⅱ．調査の方法と経過……2

Ⅲ．基本層位……2

Ⅳ．検出遺構と出土遺物……5

(1)　2層上面検出遺構……5

(2)　5層検出水田跡……9

(3)　8層検出水田跡……11

(4)　10層検出水田跡……12

(5)　12層検出遺構……13

(6)　13層出土遺物……15

(7)　15a層検出水田跡……15

(8)　15b層検出水田跡……17

(9)　17層検出水田跡……19

(10)　19層検出水田跡……20

Ⅴ．考察とまとめ……21

1．出土遺物……21

2．検出遺構……22

3．まとめ……25

Ⅰ．調査に至る経過

富沢遺跡は、仙台市南部、郡山低地の後背湿地に位置し、主として近世～弥生時代の水田跡を包蔵する遺跡として登録されていた。遺跡の所在する地区周辺は、近年、仙台市内の副都心として土地区画整理事業後、高速鉄道（地下鉄）の開通、都市計画道路の整備と、急速に開発が進んでいる地域である。その中にあって富沢地区は、区画整理時の盛土によって覆われてしまい、応時の姿を垣間見ることができず、遺跡の内容の解明が急がれているところである。

昭和62年５月13日付けで、住友不動産㈱から富沢遺跡内の、仙台市長町南三丁目９－５にかかる地区、744㎡について、共同住宅（マンション）建築に係る発掘届が提出された。仙台市教育委員会文化財課では、開発地が遺跡の範囲内に位置しており、工事により遺跡が損われることが明らかになったことから、住友不動産㈱と協議の上、記録保存を図ることを目的とした発掘調査を行うこととなった。発掘調査は昭和62年８月25日より開始された。

第１図　調査区位置図

Ⅱ．調査の方法と経過

調査対象面積は、744㎡である。発掘区はマンション建築部分に盛土の崩落を考慮し、また排土運搬部分を確保するため隣地との境界から0.7mに設定されていた東及び西壁部分を境界から各々2.5m～3m離して設定した。面積は約255㎡である。

重機により盛土及び旧水田耕作土を排除し、その後人力によって遺構確認作業を行なった。

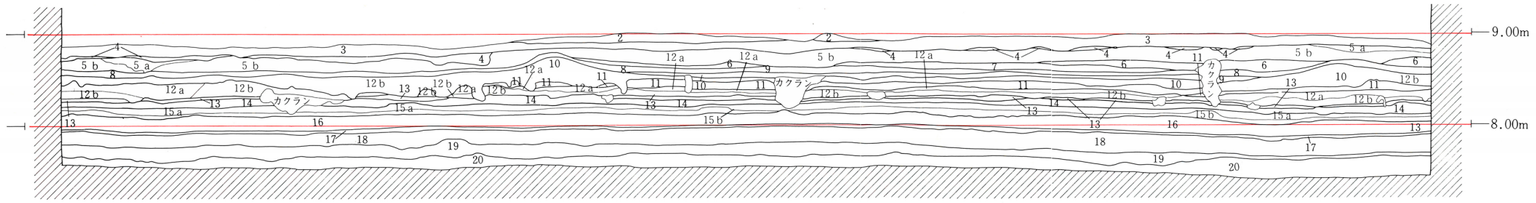
旧水田耕作土排除中に溝跡が検出された。5層上面で平安時代以降の水田跡、8層、10層上面で平安時代の水田跡、12層上面で平安時代の溝跡が検出された。15a層、15b層、17層、19層上面で水田跡が検出された。

調査中、遺構測量の際には、国家座標の任意の点（国家座標X系X＝－197.558km、　Y＝＋4,200km）を原点とし、国家座標の方向を基線として、東北線を縦軸に、東西線を横軸に3mグリットを区画して基準線を設定した。平面図は1/40の図面を作成した。遺構断面図、土層断面図については1/20の縮尺を用いた。

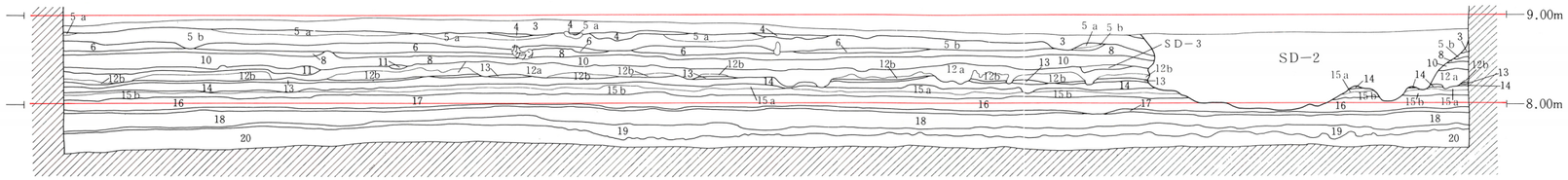
水田が予想された19層まで全面調査を行ない、以下の層は、深掘り試掘区を設定し、31層まで掘り下げ、調査を行なった。屋外調査は昭和62年10月31日に終了した。

Ⅲ．基本層位

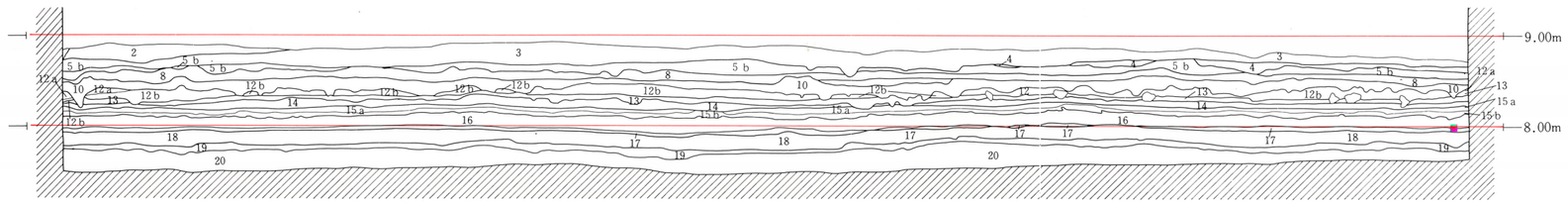
基本層位は盛土1層から31層まで確認された。しかし、基盤となる砂礫層までは確認していない。これらはさらに35層に分けられる。1層は区画整理時の盛土である。2、3層は盛土以前の水田作土である。4層は後世の耕作によって削平されているものと思われ、部分的にしかみられない。3層下に直接5層が確認される部分がみられる。5層中には灰白色火山灰が斑に混入している。また、8層上面にまとまって灰白色火山灰が検出されている。6層、7層は調査区東側にのみ確認され、ほとんどの場所では5層下に直接8層が確認される。9層は調査区東側を中心として分布する。11層以下は泥炭層になり、未分解の植物遺体を多量に含む層（未分解植物層）と粘土層が互層になっている。調査区南側では、10層が厚く堆積しており、11層が確認できない。また、12層が凹み状に厚く堆積しており、12層下で15層が確認される部分もある。15層以下は各層が調査区全面に確認される。泥炭層中で水田土壌は比較的分解が進んでおり、未分解植物層とは区別される。また、調査区南側では16層以下が凹地状を呈する部分がある。これは、深掘りの結果確認された最下層の31層においても同様の凹み状を呈しており、調査区南側部分に何らかの凹地が存在し、その凹地は16層の堆積後に凹んだものか、あるいは堆積以前に凹んだものが16層が堆積した段階で埋まりきったものであると推測される。



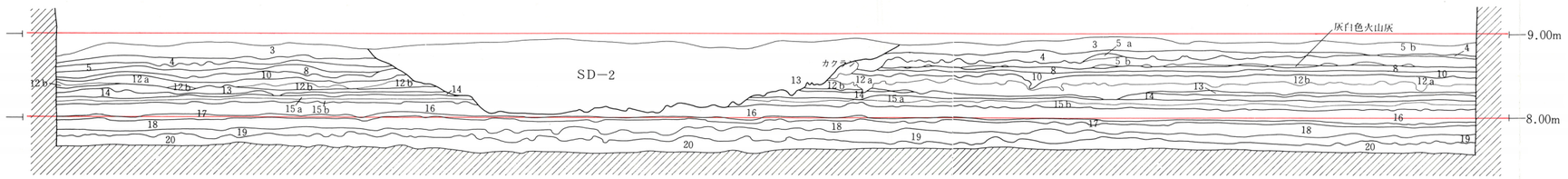
東　壁



南　壁



西　壁

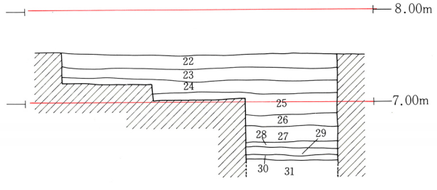


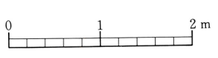
北　壁

第２図　調査区土層断面図

第１表　富沢遺跡（第33次調査）基本層位、土層註記表

層位	土　色	土　性	備　　考
1	盛土		
2	灰5Ｙ⅘	粘土質シルト	酸化鉄を含む。
3	黄灰2.5Ｙ⅘	シルト質粘土	酸化鉄、炭粒を含む。
4	黒褐10ＹＲ⅔	粘土質シルト	酸化鉄を含む。
5 a	褐灰10ＹＲ⅔	シルト質粘土	酸化鉄、マンガンを含む。
5 b	灰オリーブ5Ｙ⅔	シルト質粘土	酸化鉄、マンガンを含む。
6	暗灰黄2.5Ｙ⅔	シルト質粘土	下部にマンガンを含む、灰白火山灰を含む。
7	褐灰10ＹＲ⅘	シルト質粘土	酸化鉄、多量のマンガンを含む。
8	褐灰10ＹＲ⅘	粘土	粘土10ＹＲ⅘を霜ふりに含む。酸化鉄、多量のマンガン含む。上面に灰白火山灰ののる部分有。
9	黄灰2.5Ｙ⅘	粘土質シルト	多量の酸化鉄、粘土2.5Ｙ⅞斑状に含む。
10	灰5Ｙ⅘	粘土質シルト	粘土粒5Ｙ⅔、粘土粒10ＹＲ1.7/1霜ふり状に含む部分有。酸化鉄を含む。
11	オリーブ黒5Ｙ⅔ 灰オリーブ5Ｙ⅔	シルト質粘土 シルト質粘土	部分的に攪拌された痕跡有。泥炭層植物遺体含む。
12 a	灰5Ｙ⅘	シルト質粘土	炭化物粒、粘土粒2.5Ｙ⅔を含む。
12 b	黒10ＹＲ1.7/1 灰黄2.5Ｙ⅔	粘土質シルト 粘土質シルト	互層
13	褐灰10ＹＲ⅘	粘土	炭化物を含む。部分的に粘土7.5ＹＲ⅔、粘土質シルト10ＹＲ⅔を含む。
14	褐7.5ＹＲ⅔ 黒5ＹＲ1.7/1 にぶい黄褐10ＹＲ⅔	粘土質シルト 粘土 粘土質シルト	互層
15 a	灰5Ｙ⅘	シルト質粘土	炭化物粒を含む。
15 b	暗灰黄2.5Ｙ⅔	シルト質粘土	
16	黒7.5ＹＲ1.7/1 褐10ＹＲ⅔ 灰オリーブ7.5Ｙ⅔	粘土質シルト 粘土 粘土	互層
17	オリーブ黒5Ｙ⅔	粘土	
18	黒7.5ＹＲ1.7/1 褐10ＹＲ⅔ 灰オリーブ7.5Ｙ⅔	粘土質シルト 粘土 粘土	互層
19	暗褐10ＹＲ⅔	粘土	多量の植物遺体を含む。シルト質粘土2.5Ｙ⅔をまき上げている部分有。
20	黒10ＹＲ1.7/1 暗オリーブ5Ｙ⅔	粘土 粘土	未分解植物層
21	黒10ＹＲ1.7/1	粘土	未分解植物層
22	黒褐10ＹＲ⅔	粘土	未分解植物層
23	黒10ＹＲ⅔	粘土	暗オリーブ5Ｙ⅔を層状に含む。
24	灰オリーブ5Ｙ⅔ 黒10ＹＲ1.7/1 灰オリーブ5Ｙ⅔	粘土 粘土 粘土	互層
25	黒10ＹＲ1.7/1 黒7.5ＹＲ1.7/1 黒褐10ＹＲ⅔	粘土 粘土 粘土	未分解植物層 未分解植物層
26	黒10ＹＲ1.7/1	シルト質粘土	
27	オリーブ黒10Ｙ⅔	粘土	灰オリーブ7.5Ｙ⅔をブロック、霜ふり状に含む。
28	灰オリーブ7.5Ｙ⅔	シルト質粘土	
29	黒5Ｙ⅔	粘土	
30	黄褐2.5Ｙ⅔	粘土	
31	黒10ＹＲ1.7/1	粘土	





深掘区土層断面図

Ⅳ．検出遺構と出土遺物

今回の調査で検出された遺構は、２層上面で溝跡、５層、８層、10層上面で水田跡、12層上面で溝跡、15ａ層及び15ｂ層、17層、19層上面で水田跡が検出されている。

遺物は整理用平箱（テンバコ32）にして３箱程度の出土量である。弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、石製品、木製品、金属製品などがある。

なお、調査中ＳＤ－１、ＳＤ－２とした溝跡は、盛土以前まで機能していた１本の水路であることが確認された。しかし出土遺物より19世紀以前まで遡ることが指摘されたため取り上げることとした。

(1)　２層検出遺構と出土遺物

２層上面では溝跡１条が検出されている。

ＳＤ－２溝跡

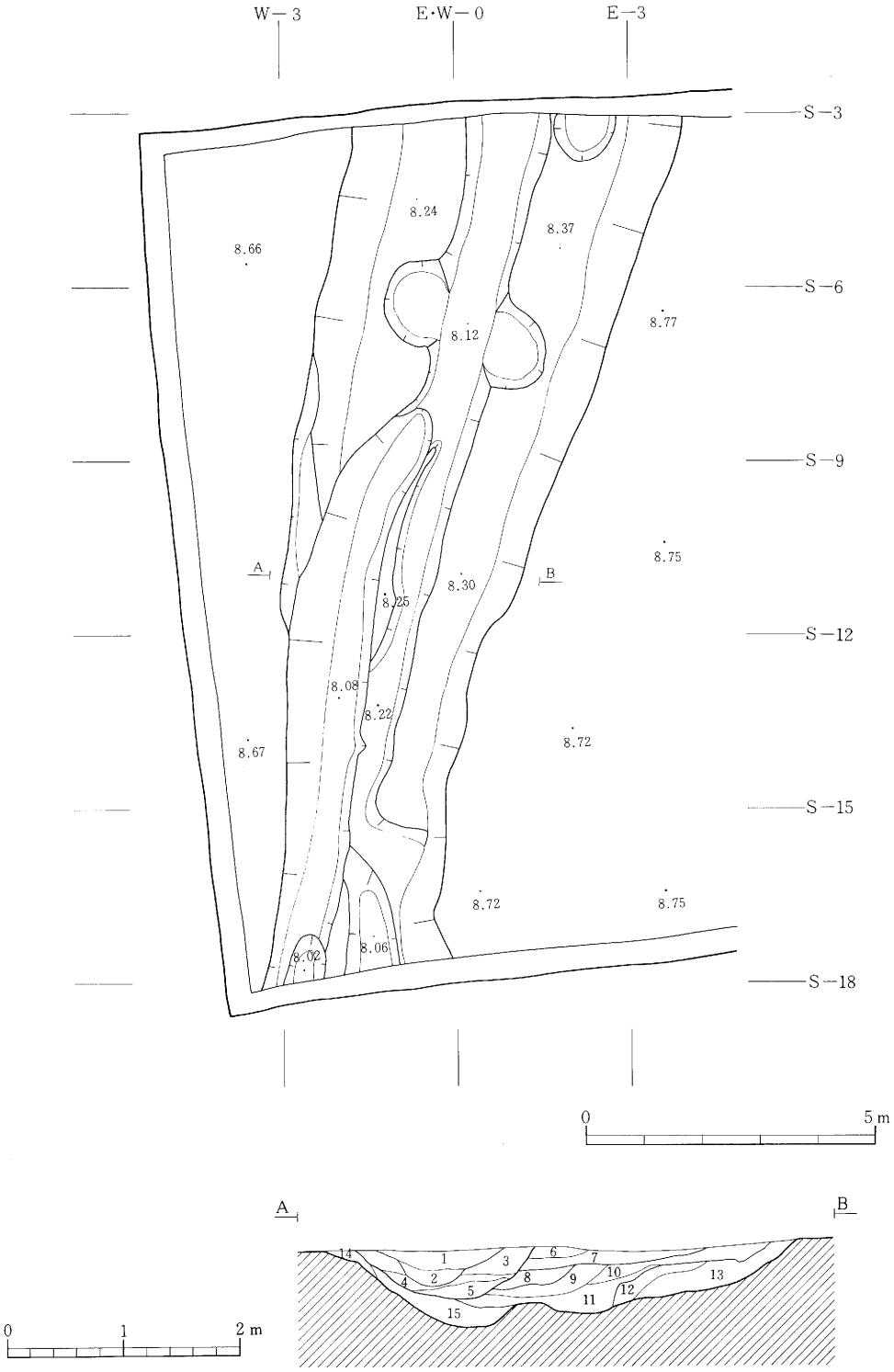
本遺構は調査区西寄りに位置し、調査区を斜めに横切るようにほぼ直線的に延びている。調査区内での方向はＮ－14°－Ｅである。上面幅で2.7m～5.4mである。北側が広くなっている。壁から底面については、壁中位に段を形成する部分、底面が凹み状に広がる部分、底面が分岐する部分などがみられ一定しない。底面幅は、分岐している部分などがあり一定しないが１ｍ前後である。断面形についても各部分で変化がみられ、一定ではないが、基本的には舟底状である。

深さは、確認面から中段まで30cm～50cm、底面までは60cm～80cmである。底面レベルは相対的に南側に傾斜している。堆積土は７層に大別される。１層は黒色の粘土層、２層は黒色の砂質土層、３層は灰～黒色の粘土～シルト層、４層は黄褐色砂層、５、７層は灰～黒色粘土層、６層は黒色シルト層である。各層は自然堆積層である。

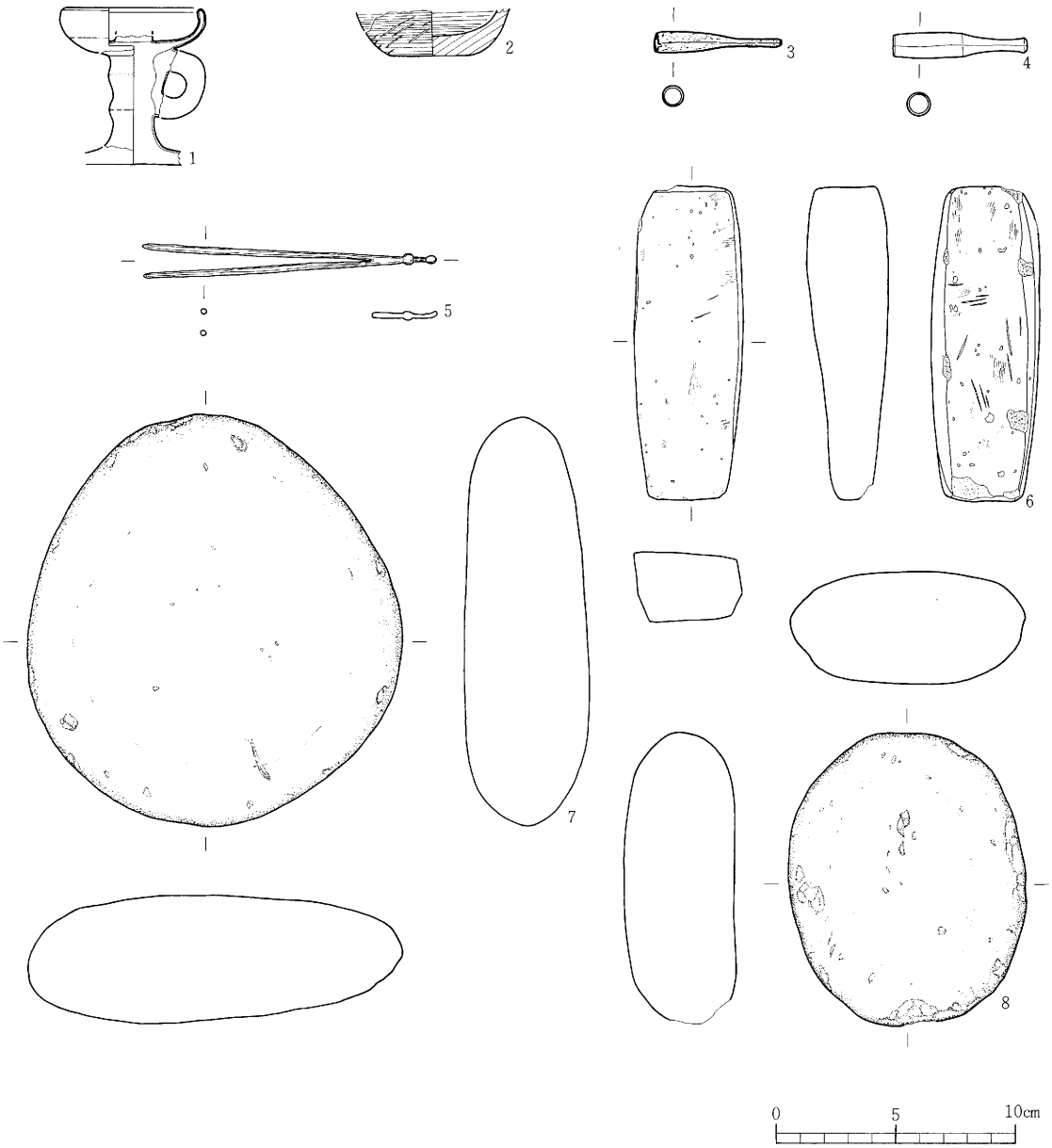
本遺構については、堆積土上部の１、２層（層No.１～５）部分が盛土される以前の水路として機能しており、かなり蛇行しながら南

第２表　ＳＤ－２堆積土註記表

層位	層No.	遺物採取層	土　色	土 性	備　考
1	1	SD−1,1層	黒褐 2.5Y3/1	粘土	微量の酸化鉄を含む。
	2	2層	オリーブ黒 5Y3/2	粘土	
2	3	3層	灰 5Y4/1	砂質粘土	酸化鉄を含む。
	4	4層	オリーブ黒 5Y3/1	砂質シルト	微量の炭化物を含む。小量の小礫を含む。
	5		黒褐 2.5Y3/1	砂質シルト	微量の炭化物を含む。小量の小礫を含む。
3	6	SD−2,1層	灰 5Y5/1	粘土	微量の炭化物を含み縞状に砂を含む。
	7	2層	オリーブ黒 5Y3/1	砂質シルト	
4	8	3層	黄褐 2.5Y5/4	シルト質砂	底面に砂を多量に含む。
5	9	4層	オリーブ黒 5Y3/1	粘土	多量の酸化鉄を縞状に含む。
	10		灰 5Y5/1	粘土	微量の砂を含む。
	11	5層	黄灰 2.5Y5/1	粘土	暗灰黄粘土2.5Y5/2を縞状に含む。小礫を含む。
6	12		オリーブ黒 5Y3/2	シルト	暗灰黄粘土2.5Y5/2と黒粘土2.5Y3/1を縞状に含む。
	13		オリーブ黒 5Y3/1	シルト	暗灰黄粘土2.5Y5/2と黒粘土2.5Y3/1を縞状に含む。
7	14		オリーブ褐 2.5Y4/4	粘土	オリーブ黒粘土5Y3/1を縞状に含む。溝の崩落土
	15		黒褐 2.5Y3/1	粘土	微量の炭化物を含み暗灰黄粘土2.5Y5/2と黒粘土2.5Y3/1を縞状に含む。


W－3
E・W－0
E－3
S－3
S－6
S－9
S－12
S－15
S－18
8.66
8.24
8.37
8.12
8.77
8.75
8.30
8.25
8.08
8.22
8.67
8.72
8.72
8.75
8.06
8.02
A
B
0
5 m
A
B
14
1
3
6
7
4
2
8
9
10
13
5
12
11
15
0
1
2 m

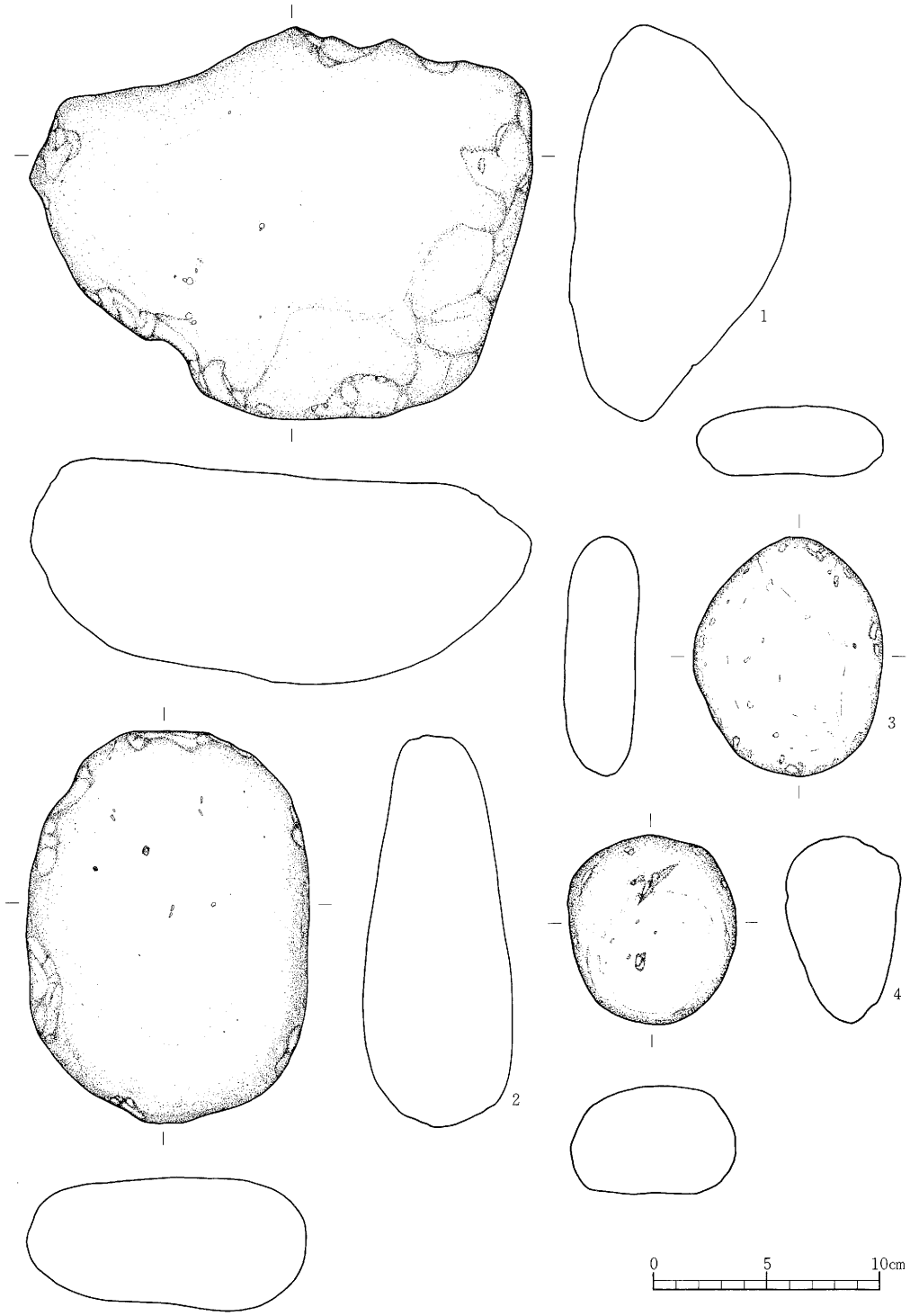
第3図　SD－2溝跡



No.	種　　別	遺構・層位	外　　面	底　部	内　　面	備　　考
1	提焼　　乗足	ＳＤ－2、2層	ロクロナデ・鉄釉	回転糸切り	ロクロナデ・鉄釉	把手欠損
2	木製椀	ＳＤ－2、5層	回転削り	回転削り	回転削り	

No.	種　別	遺構・層位	長×幅×厚(cm)	備　考
3	煙管・吸口	ＳＤ－2、5層	5.3×0.9×0.05	銅製
4	煙管・吸口	ＳＤ－2、2層	5.6×1.0×0.1	真鍮製
5	簪	ＳＤ－2、5層	12.3×0.5×0.5	頭部耳掻
6	砥　　石	ＳＤ－2、2層	13.2×4.5×3.5	
7	礫　石　器	ＳＤ－2、5層	17.2×15.7×5.2	磨－片面
8	礫　石　器	ＳＤ－2、5層	12.2×10.0×4.8	磨－片面

第４図　ＳＤ－２出土遺物(1)



No.	種　別	遺構・層位	長×幅×厚(cm)	使　用　痕
1	礫　石　器	ＳＤ－２、５層	22.1×17.3×9.3	磨－片面
2	礫　石　器	ＳＤ－２、５層	17.3×12.3×5.5	磨－片面
3	礫　石　器	ＳＤ－２、５層	10.6×8.3×3.1	磨－片面
4	礫　石　器	ＳＤ－２、４層	8.3×7.3×4.7	磨－片面

第５図　ＳＤ－２出土遺物(2)

流していたものであることから、上端幅内全面が江戸時代頃からの本来の水路幅であり、その幅員内を蛇行するというものだったと考えられる。

遺物の出土状況、堆積土の状況についても砂層、粘土層のあり方から流路が一定でなかったことを示すものであると考えられる。

遺物は各層から出土している。陶磁器、木製品、石製品、金属製品、瓦類、ガラス製品等がある。出土状況については集計表に示す。遺物の種類や出土層位にまとまりはみられず、規則性は認められない。

〔出土遺物〕

図示遺物は、陶器、木製品、金属製品がある。第４図１は、堤焼の秉燭である。把手及び脚端部を欠いている。内外面ともに鉄釉が施されている。２は木製の椀である。口縁部を欠いている。内、外面ともロクロによって形成されている。３・４は煙管の吸い口であり、３は銅製、４は真鍮製である。３には羅宇の一部が残存していた。５は簪である。頭部は耳掻きになっている。６は砥石である。短冊形でやや中央部が膨らんでいる。両側面に陵を持ち、断面形は六角形を呈している。砥面には、皿状に凹んだ面もみられる。擦痕が観察される部分もみられる。７・８、第５図１～４は礫石器である。偏平なもの、厚みのあるものがある。それぞれ片面に磨面が観察される。その他に多数の陶磁器がある。第５図１の秉燭を除いて、他は全て破片資料である。産地が判明するものには、肥前、唐津、瀬戸、相馬、堤などがある。時代的には、中世（14世紀以降）から明治以後の近代、現代のものまで認められる。この内、幕末から明治にかけてのものが多い。

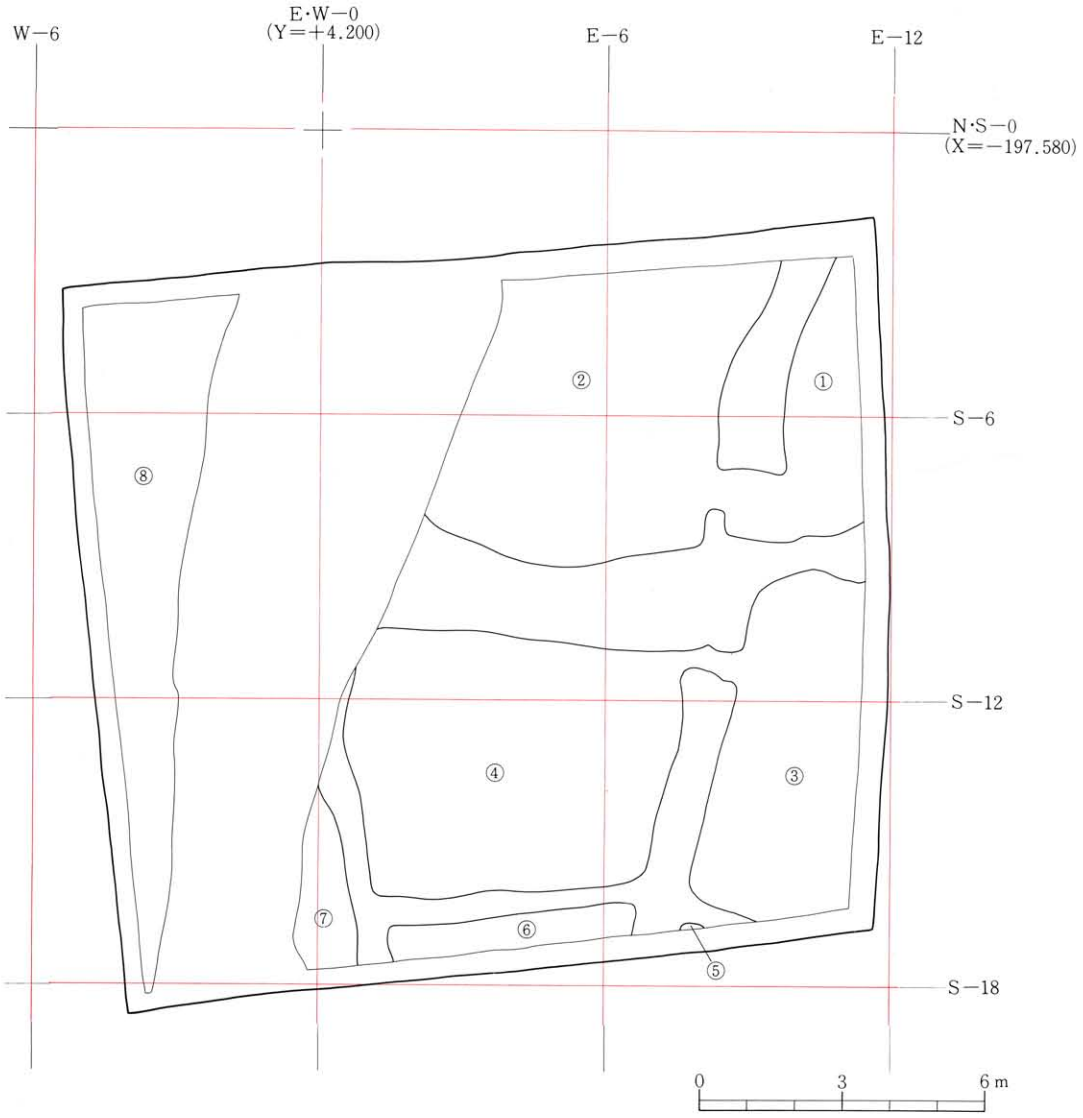
(2)　５層検出水田跡

４層下面で検出された部分もあるが、４層は部分的にしか存在せず大部分は３層下面で検出された。４層以上の耕作によると思われる削平により畦の盛り上がりは検出できなかった。

しかし、作土中に斑に混在していた灰白色火山灰が帯状に途切れる部分が検出され、畦の痕跡であると判断された。

〔水田面の状況〕　確認された水田面の枚数は前述の確認状況であり、ＳＤ－２により分断されているため不正確ではあるが、①～⑧の８枚である。ＳＤ－２の東側はほぼ東西－南北方向に延びる畦畔により区画される水田が７枚検出され④のみ一区画の規模が推定でき、およそ34㎡前後と考えられる。⑦についてはＳＤ－２の西側まで広がっているものと考えられ、⑧は区画があったものと考えられるが、ＳＤ－２の西側では畦畔の痕跡は確認されなかった。

〔畦畔の状況〕　畦畔の痕跡として確認されたため、方向と確認された時点での幅について述べる。南北方向のもの３条、東西方向のもの２条が確認されている。それぞれの方向につい



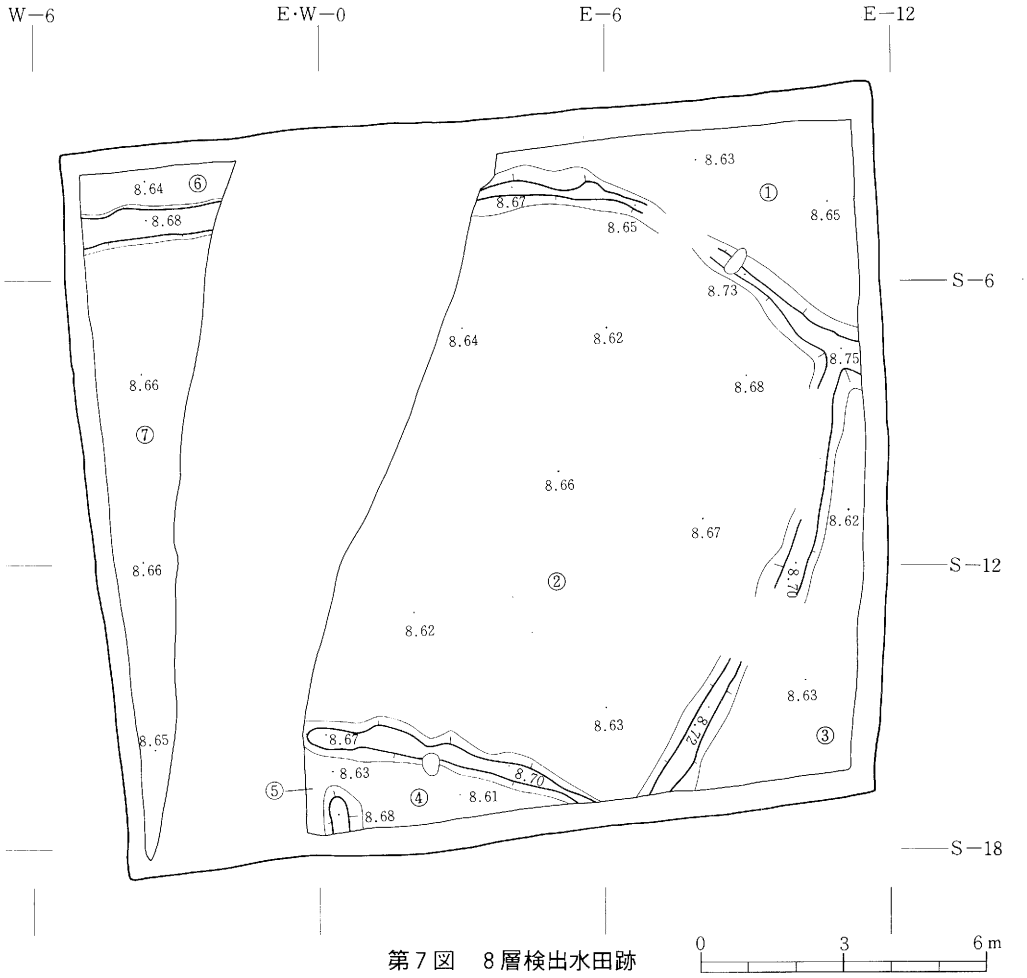
第６図　５層上面確認水田跡

てみると、Ｓ－９ライン上を東西に延びる畦畔はほぼ真東西方向を指し、これに直交するＥ－７～Ｅ－10ライン上を南北に延びる畦畔は西に、Ｅ－１～Ｅ－０ラインを南北に延びる畦畔は東にそれぞれ約10°傾いている。また、④と⑥の間の畦畔は北に約40°傾いている。

畦畔の幅についてはＳ－９ラインの畦畔が約70～200cmあり、東側が細くなっている。Ｅ－7～Ｅ－10ラインの畦畔は85～150cmである。他の畦畔の幅は35～50cmと細くなっている。

また、畦畔が途切れる部分が２ケ所あるが、水口であった可能性もある。

〔遺物出土状況〕　５層からの遺物の出土は少なく、羽口の小破片が１点と土師器の細片が数点あるだけであり、図示遺物はない。



第７図　８層検出水田跡

(3)　８層検出水田跡

〔**水田面の状況**〕　当水田面には、作土上面及び畦畔上に灰白色火山灰が斑状あるいはブロック状にかたまった状態で確認されている。確認された水田面の枚数は①～⑦の７枚である。畦畔は作土と同じ土によって作られており、畦畔と作土とを明確に区別することはできなかった。一区画の規模は不明であるが、②は、北、東、南の畦畔が確認され西側の畦畔はＳＤ－２によって削平されていると考えられ、一枚の規模は80～100㎡前後であると推定される。⑤についてはＳＤ－２の西側まで広がっていると考えられ、⑦にはさらに区画があったものと考えられるが畦畔については不明である。

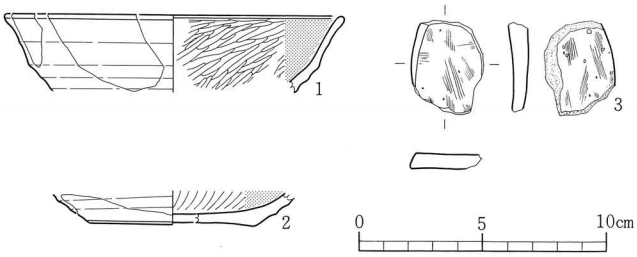
〔**畦畔の状況**〕　畦畔はＳＤ－２の東側で南北方向のもの２条、東西方向のもの２条、ＳＤ－２の西側で東西方向のもの１条が検出されている。それぞれの方向は、Ｅ－６～Ｅ－10に延びるものは東に約20°傾いている。東西方向のものは、Ｓ－17～Ｓ－16に延びるものは北に約

15°傾き、S－8～S－4に延びるものは北に約30°傾いているが緩やかに南側へ弯曲している。SD－2の西側のものは南へ約10°傾いている。畦畔の規模は、SD－2の東側では上端幅で15～40cm、下端幅で70～100cmであるのに対し、西側のものでは上端幅で55～70cm、下端幅では70～90cmである。畦畔の高さは第7図から明らかなように数cm程度であり、後世の耕作のためのものと思われるが、作土上面で盛り上がりが所々途切れている部分がある。

また水田面④と⑤の間の畦畔とS－17～S－16に延びる畦畔の間が途切れているが他の畦畔が途切れている部分と状況が異なっており、水口であると考えられる。

〔遺物出土状況〕 作土上面及び作土中より今回の調査区内では比較的多くの遺物が出土している。土師器片、須恵器片、石製品があり、土師器の小片が多い。

〔出土遺物〕 図示しえたものは、土師器坏2点と砥石の破片1点のみである。1は体部上半部、2は底部である。いずれも製作に際してロクロを使用している。2の底部の切り離しは回転糸切りで、再調整はみられない。器面調整は、外面はロクロ調整のみであり、内面はヘラミガキ・黒色処理が施されている。ヘラミガキの方向は、体部上半部で斜方向、底面では放射状である。3は砥石である。砥面は皿状に凹んでおり、擦痕もみられる。



No.	種　別	層位	外　面	底　部	内　面
1	土師器坏	8層	ロクロナデ	――――	ミガキ・黒色処理
2	土師器坏	8層	ロクロナデ	回転糸切り	ミガキ・黒色処理

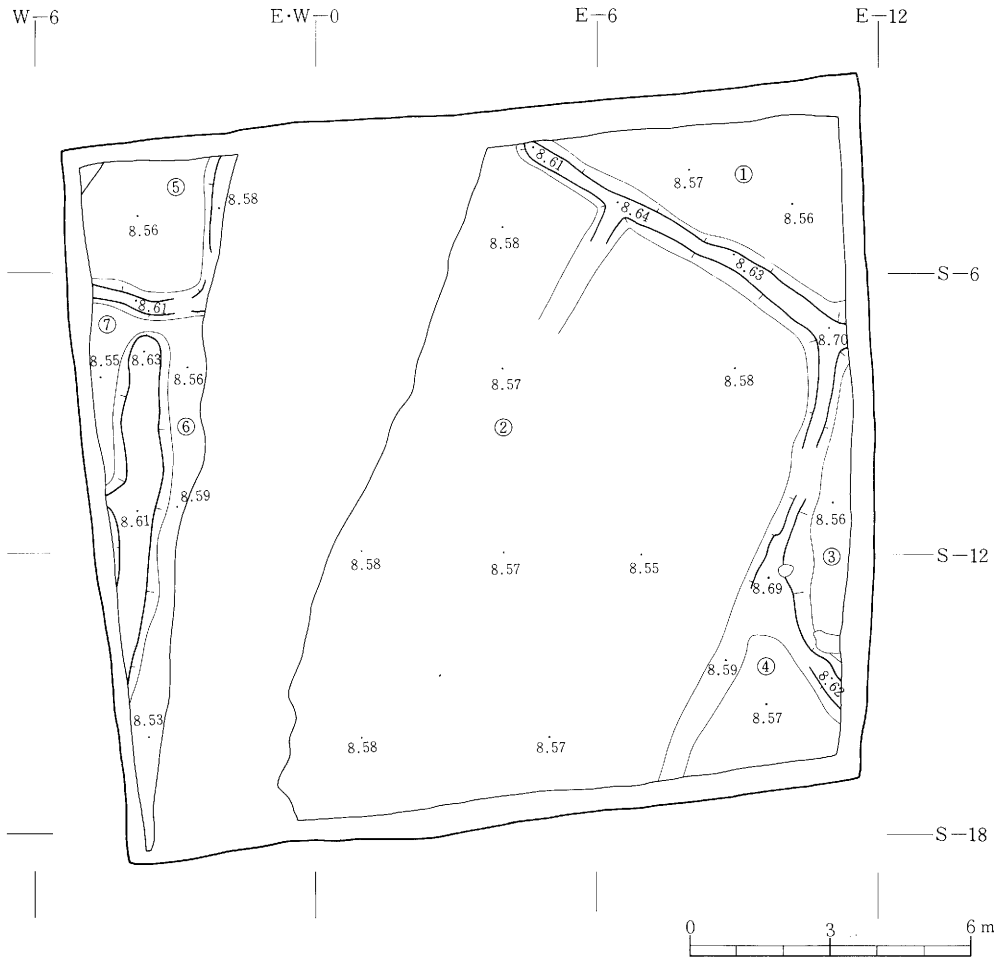
No.	種　別	層位	長×幅×厚(cm)
3	砥　石	8層	(3.6)×(2.9)×0.8

第8図　8層水田跡出土遺物

(4) 10層検出水田跡

〔水田面の状況〕 10層で確認された水田面は①～⑦の7枚である。畦畔は作土と同じ土によって作られており、畦畔と作土を明確に区別することはできなかった。一区画の規模が判明する水田は一面もない。水田②については、北側の畦畔から南西方向に畦が延びていた痕跡が認められ、さらに小さな区画がなされていたものと考えられる。作土上面における傾斜はほとんどみられない。

〔畦畔の状況〕 畦畔はSD－2の東側で東西方向のもの1条、南北方向のもの1条、SD－2の西側で東西方向のもの1条、南北方向のもの2条が検出されている。それぞれの方向は、SD－2東側においては、東西方向のもののうち北側のものはW－約30°－Nである。南北方向のものは、N－約25°－Eであり、E－9、S－13付近で2方向に分れ東側へ延びるものはおよそS－30°－Eの方向で延びている。また水田面②を区画していたと思われる畦についてはN－



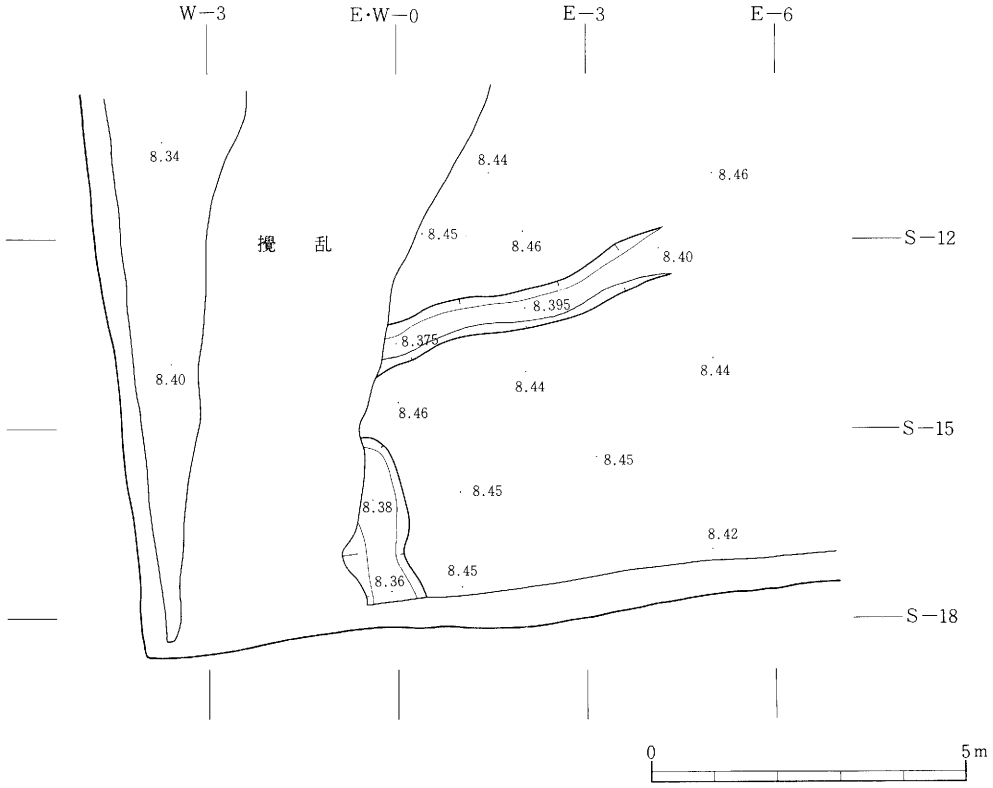
第９図　10層検出水田跡

約30°－Ｅである。ＳＤ－２の西側では、南北方向の２条のものはいずれもＮ－約5°－Ｅである。東西方向のものは弯曲しているがほぼ真東西方向に延びている。畦畔の規模は、ＳＤ－２の西側の水田⑥と⑦の間の畦畔のみが、上端幅60～80cm、下端幅120cm前後であるのに対して、他の畦畔は上端幅25～50cm、下端幅50～90cm程度である。畦畔の高さは数cm～10cm程度である。特に調査区南東部分では、畦畔の盛り上がりが観察できない部分もある。また、水田面⑥と⑦の間の畦畔と水田面⑤の南側の畦畔は交差せず水口であると思われる。

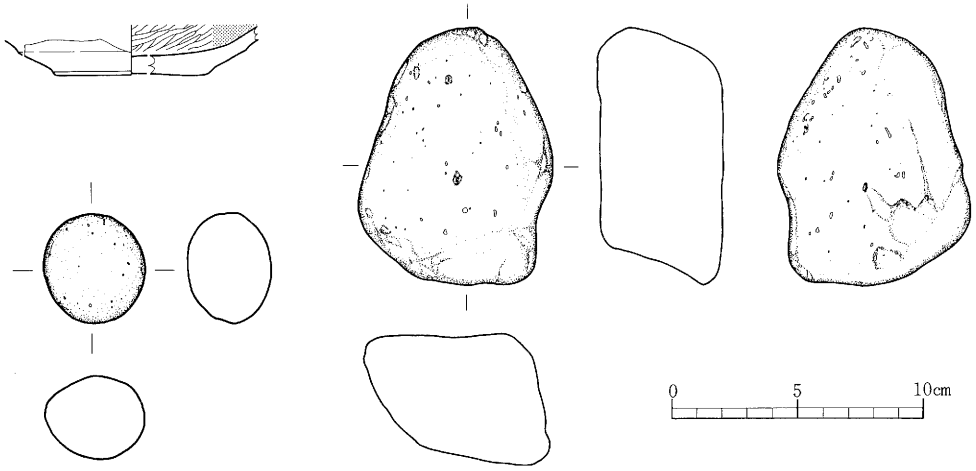
〔遺物出土状況〕　作土中より、土師器小片が数点出土しているだけであり、図示遺物はない。

(5)　12層検出遺構

ＳＤ－３溝跡　12ａ層上面のＳ－12・Ｅ－４付近からＳ－18・Ｅ、Ｗ－０にかけて検出さ



第10図　ＳＤ３溝跡



No.	種　別	層　位	外　面	底　部	内　面
1	土師器坏	12層上面	ロクロナデ	回転糸切り	ミガキ・黒色処理

No.	種　別	層　位	長×幅×厚(cm)	使用痕
2	礫石器	12層	4.3×4.0×3.3	磨ー全面
3	礫石器	12層	10.2×7.7×4.9	磨ー両面

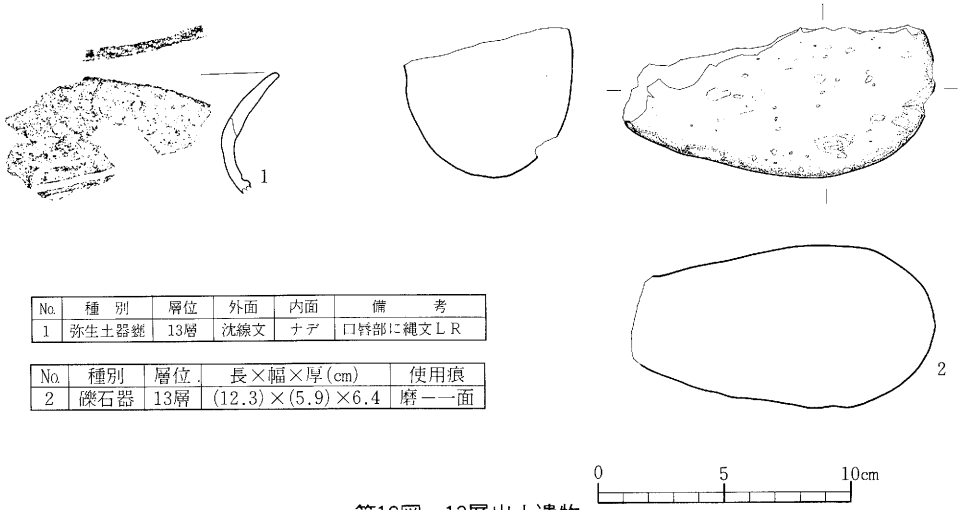
第11図　12層出土遺物

れたが、削平のためか、遺構の一部が残存するのみであり、全体を把握することはできなかった。また、ＳＤ－２に切られており、本来同一の「Ｌ」字形の溝であるのか、２条の溝であるのかは、堆積土が同一で判別することはできなかった。方向は北側部分は、Ｗ－18°－Ｓ、南側部分は、Ｎ－15°－Ｗである。堆積土は、7.5Ｙ5/1灰粘土質シルトの単層である。水田に取り付く水路であるかどうかについては、12層で水田の痕跡が検出されておらず不明である。溝に伴なう出土遺物はないが、12層上面で数点の土師器の小破片、石器が出土している。

〔**出土遺物**〕　図示したものは、土師器坏１点と礫石器が２点である。１は底部で、製作に際してロクロを使用している。底部の切り離しは回転糸切りである。再調整はみられない。器面調整は、外面はロクロ調整のみであり、内面はヘラミガキ・黒色処理が施されている。２・３は礫石器である。いずれも全面に磨痕が認められる。

(6)　13層

13層では、上面・層中において遺構は検出されなかったが、層中より弥生土器片と礫石器が出土している。弥生土器は同一個体であると思われる。小破片であり、全体の器形は不明であるが、頸部で「く」字状に屈曲し、口縁部は外反しながら立ちあがる。頸部に２条、横位の沈線文が施され、口縁部にＬＲ縄文が施文されている。口縁部内・外面ともナデ調整されている。礫石器は破損品である。



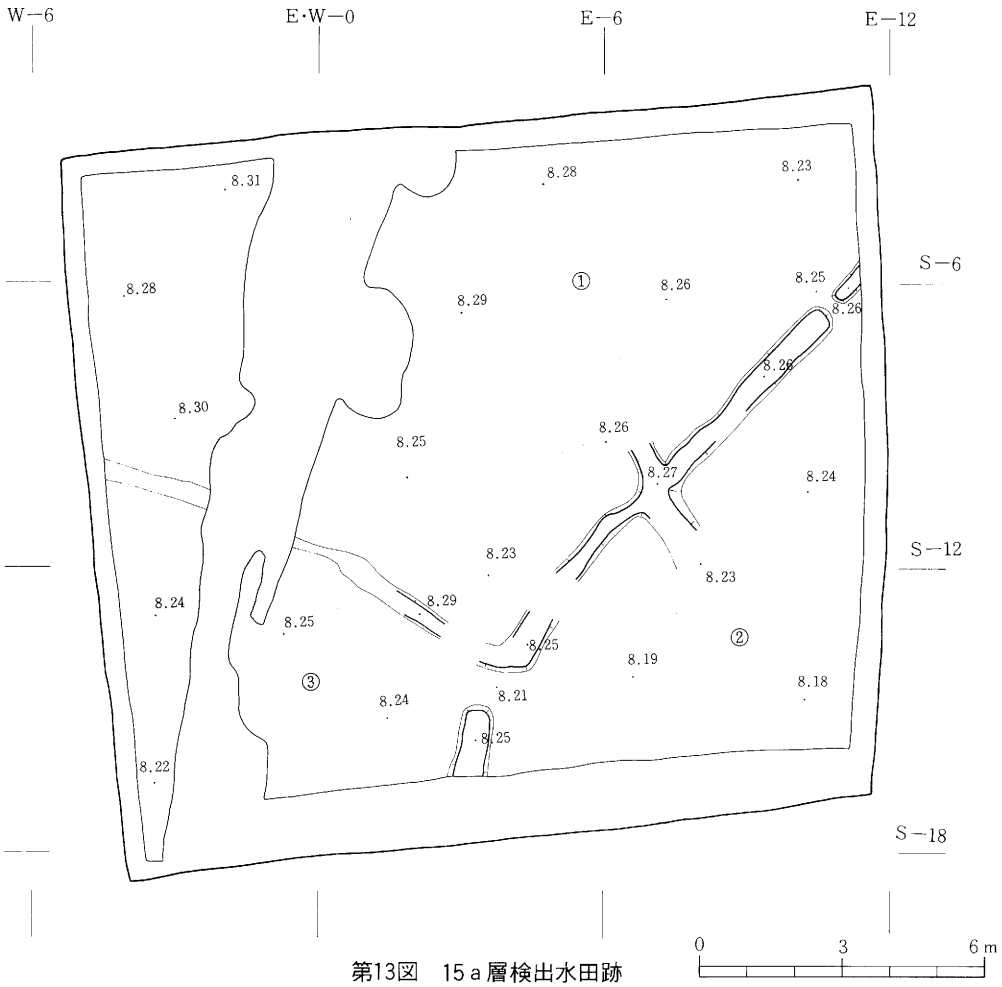
No.	種　別	層位	外面	内面	備　　考
1	弥生土器甕	13層	沈線文	ナデ	口唇部に縄文ＬＲ

No.	種別	層位	長×幅×厚(cm)	使用痕
2	礫石器	13層	(12.3)×(5.9)×6.4	磨――面

第12図　13層出土遺物

(7)　15ａ層検出水田跡

〔**水田面の状況**〕　15ａ層上面では３条の畦畔が検出され、水田面は大きく①～③の３枚しか把えられない。畦畔は作土と同じ土によって作られており、畦畔と作土を明確に区別するこ



第13図　15ａ層検出水田跡

とはできなかった。水田面の区画については、その枚数、規模ともに不明である。しかし、東側の畦畔に、他の畦畔が交差していたと思われる部分があり、水田区画が存在していたことは推測できる。作土上面においては南東方向への緩やかな傾斜がみられ、特に②の水田面においては顕著である。

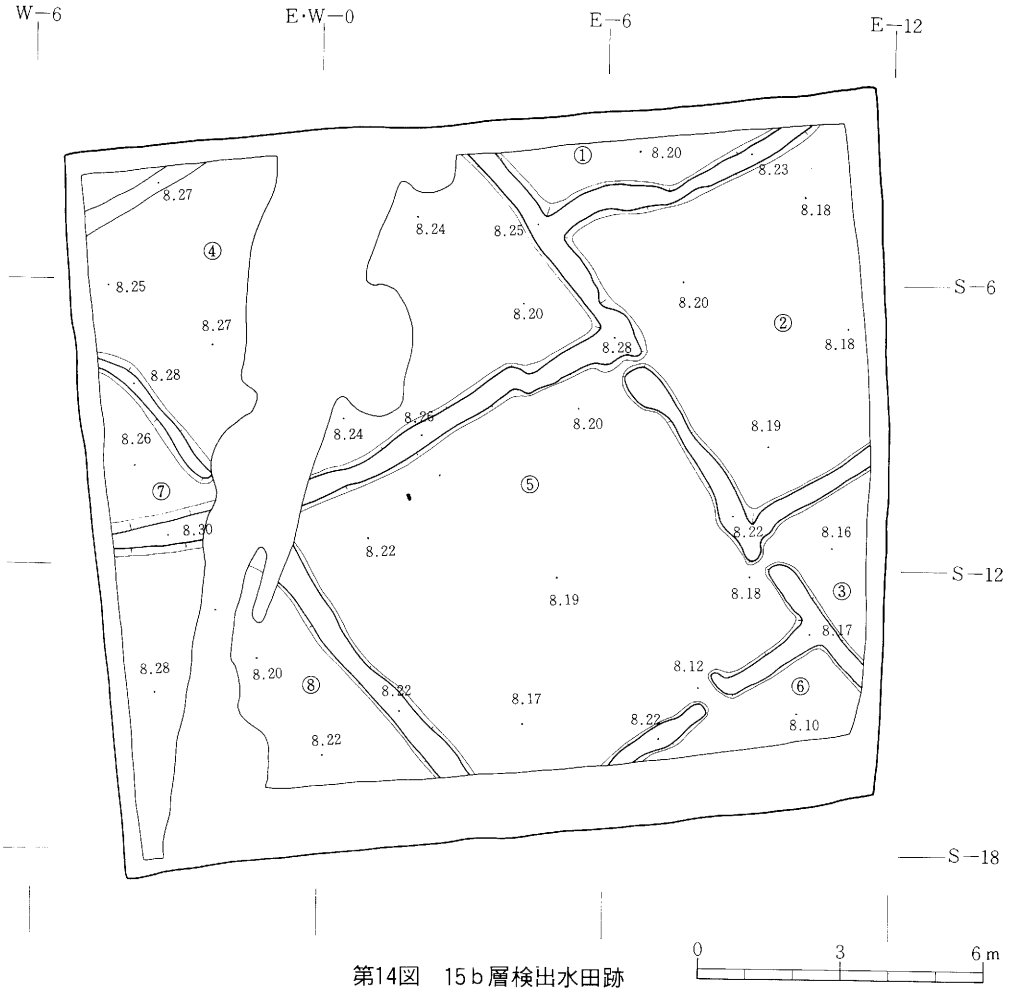
〔畦畔の状況〕　東側の畦畔はＥ−45°−Ｎの方向を指して東側へ延びている。Ｅ−７・Ｓ−10付近で南北方向に畦畔が延びていた痕跡が認められ、Ｎ−約30°−Ｗ方向で延びていたものと思われる。Ｅ−４・Ｓ−14付近で屈曲し、Ｗ−約25°−Ｎの方向を指して緩やかに弯曲しながら西側に延びている。Ｅ−２ラインより西側では畦畔の盛り上がりは観察できなかった。南側の畦畔はＮ−10°−Ｅの方向を指し、南側へ延びている。畦畔の規模は上端幅20〜50cm、下端幅で35〜70cmと一定していない。高さは、数cm程度である。①と②の間の畦畔の東端付近及び、②と③の間の畦畔の北側が途切れている。他の畦畔が途切れている部分とは異なっており、水口

であると思われる。

〔遺物出土状況〕　調査区北東部の作土中より、弥生土器片が集中している。これは後述する15ｂ層水田跡出土土器と同類の破片と考えられ、15ａ層耕作の際に15ｂ層中の遺物を混入させたものと考えられる。また、同じく作土中より石器が１点出土している。

(8)　15ｂ層検出水田跡

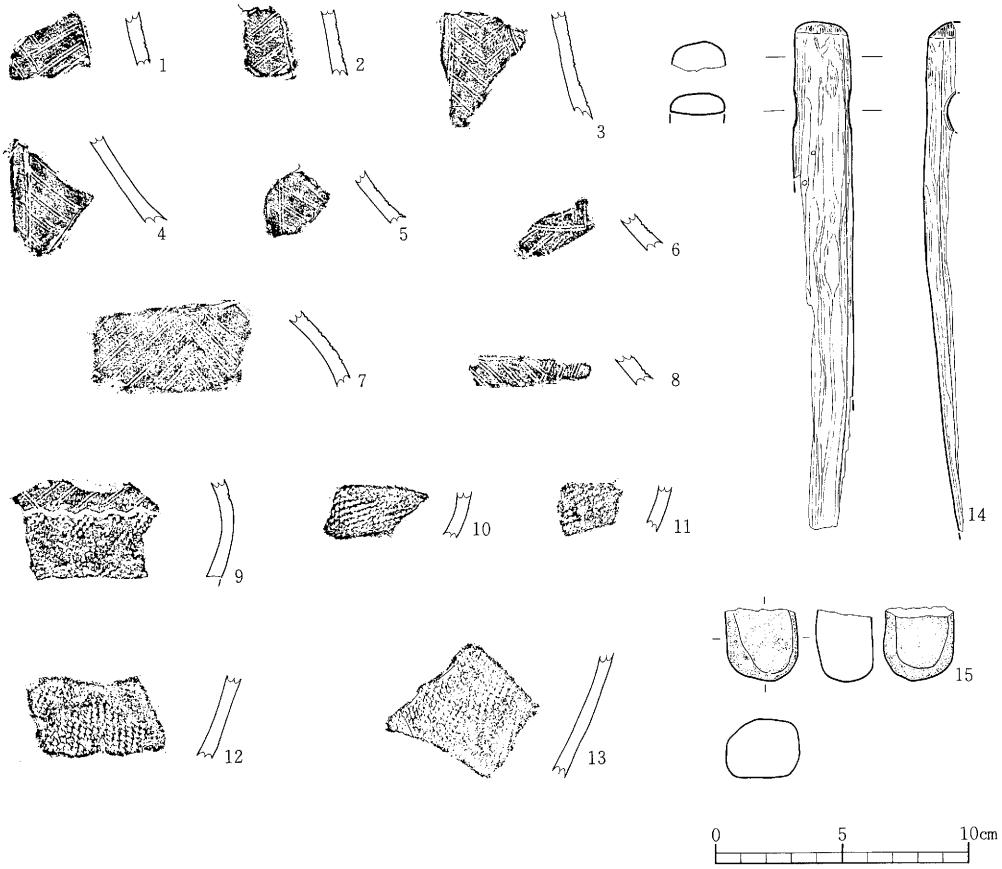
〔水田面の状況〕　確認された水田面の枚数は①～⑧の８枚である。畦畔は作土と同じ土によって作られており、畦畔と作土を明確に区別することはできなかった。調査区内において一区画が完全に検出されたものはないが、一部のみが調査区外へ広がっているものがあり、ほぼ正確に水田区画を把握することができる。その規模は東西約８ｍ、南北７～８ｍの方形で、面積は56～64㎡程度である。作土上面の傾斜は、水田面⑤・⑥・⑧において南東方向へ緩やかに傾斜している。その比高差は⑤の水田面でおよそ10cmである。その他の面では、傾斜はみられ



第14図　15ｂ層検出水田跡

ず、ほぼ平坦である。

〔畦畔の状況〕　畦畔は南北方向のもの２条、東西方向のもの４条が検出されている。それぞれの方向は、南北方向の２条の畦畔は、N－52°～55°－Wの方向を指し、東西方向の４条の畦畔は、E－28°～32.5°－Nの方向を指し、南北方向及び東西方向の畦は、ほぼ直角に交差しており、それぞれの畦畔には規則性がみられる。また、水田面①と②、④と⑤、④と⑦の間の畦畔には、屈曲や弯曲がみられる。畦畔の規模は、上端がおよそ30～50cm、下端幅は50～60cmと、ほぼ一定である。高さは数cm程度である。水田面②と⑤、③と⑤、④と⑦の間の畦畔には、畦畔の交差する部分が途切れており、それぞれ水口であると思われる。また、水田面⑤と⑥の間の畦畔では、畦畔の中央部寄りに水口と考えられる部分があり、畦畔が水口の部分で屈曲している。



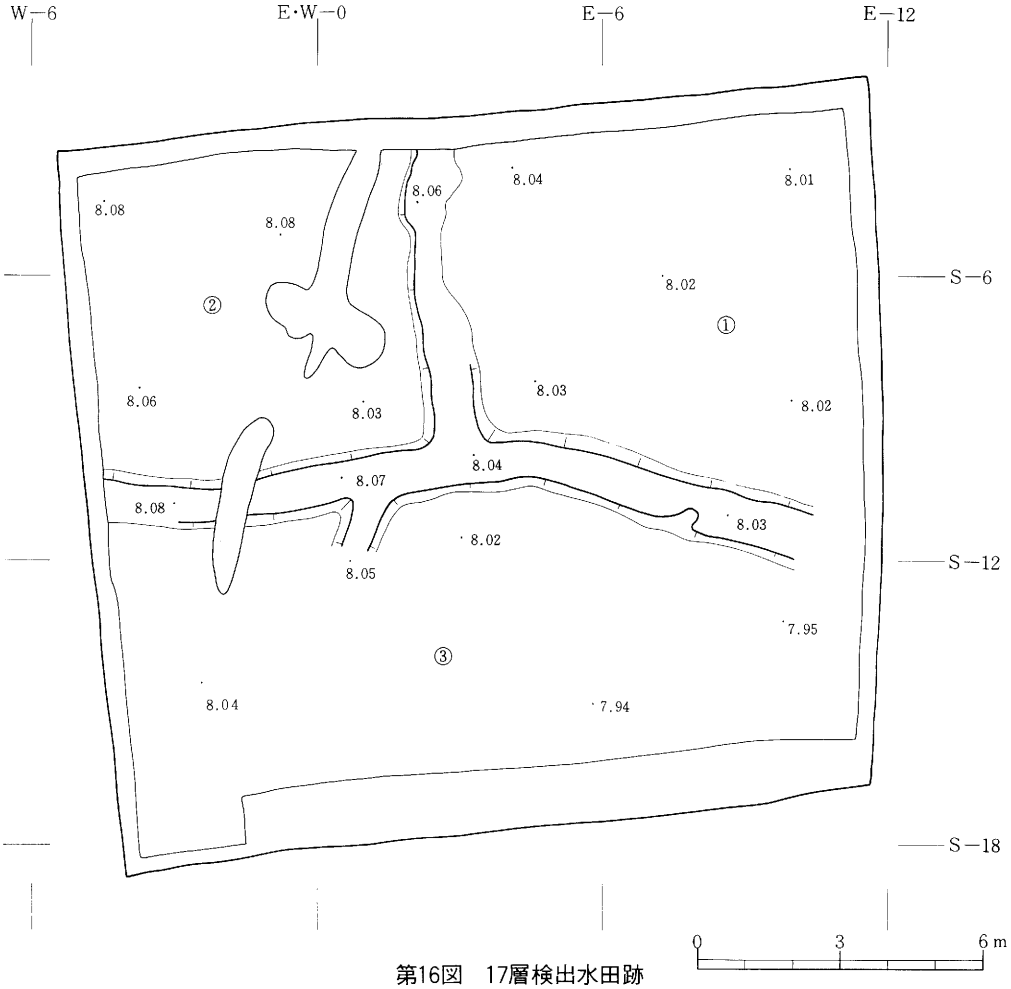
No.	種　別	層　位	外　面	内 面	備　考
1～13	弥生土器　壺？	15a、b層	頸～体部―平行沈線文(二本一描)。体部―綾絡文・LR縄文(横位)	ナデ	2・5・～7・11～13―15a層、1・3・4・8～10 15b層

No.	種　別	層位	長×幅×厚(cm)	備　考
14	不明木製品	15b 層	(20.1)×2.3×(1.3)	貫通穴有り、ヒノキ属の一種
15	磨製石斧？	15a 層	(2.9)×2.8×2.3	

第15図　15層水田跡出土遺物

〔遺物出土状況〕　調査区北東部の水田面①と②の間の畦畔部分を中心として、作土中及び畦畔上から弥生土器片が出土している。また、水田面③の作土上面より石器片と、水田面⑧の作土中より木製品が出土している。

〔出土遺物〕　1～13は弥生土器片である。文様、胎土等から同一個体と思われる。頸部から体部までの破片である。全体の器形は不明であるが、各々の破片を総合すると体部は膨らみを持ち、肩部から頸部にかけて窄まり、頸部はやや内傾しながら立ち上がっている。頸部から体部上半にかけて、半截竹管状の工具による同時施文の平行沈線文が施されている。二本一描のもので、山形文、直線文等がみられる。体部の最も膨らむ部分には、上端に綾絡文をめぐらした横位ＬＲ縄文が施され、体部下半には、ＬＲ縄文が施文されている。14は性格不明の棒状木製品である。樹種は「ヒノキ属の一種」である。上部に穿孔がみられる。15は、かなり摩滅しているが、磨製石斧の基部の可能性がある。また、図示してはいないが、擦痕のある粘板岩の小片があり、石包丁の一部である可能性がある（写真25－２）。



第16図　17層検出水田跡

(9) 17層検出水田跡

〔**水田面の状況**〕　17層上面では、2条の畦畔が検出されており、水田面は①～③と大きく3枚しか把えられない。畦畔は作土と同じ土によって作られており、畦畔と作土を明確に区別することはできなかった。水田面の区画については、その枚数、規模ともに不明である。しかし、東西方向の畦畔には、南側へ畦畔が取り付く部分がみられ、③の水田面には、さらに区画が存在していたものと思われる。作土上面の傾斜は、水田面①、②においてはほとんどみられないが、水田面③においては、南東側へ緩やかに傾斜している。その比高差は約8cmである。

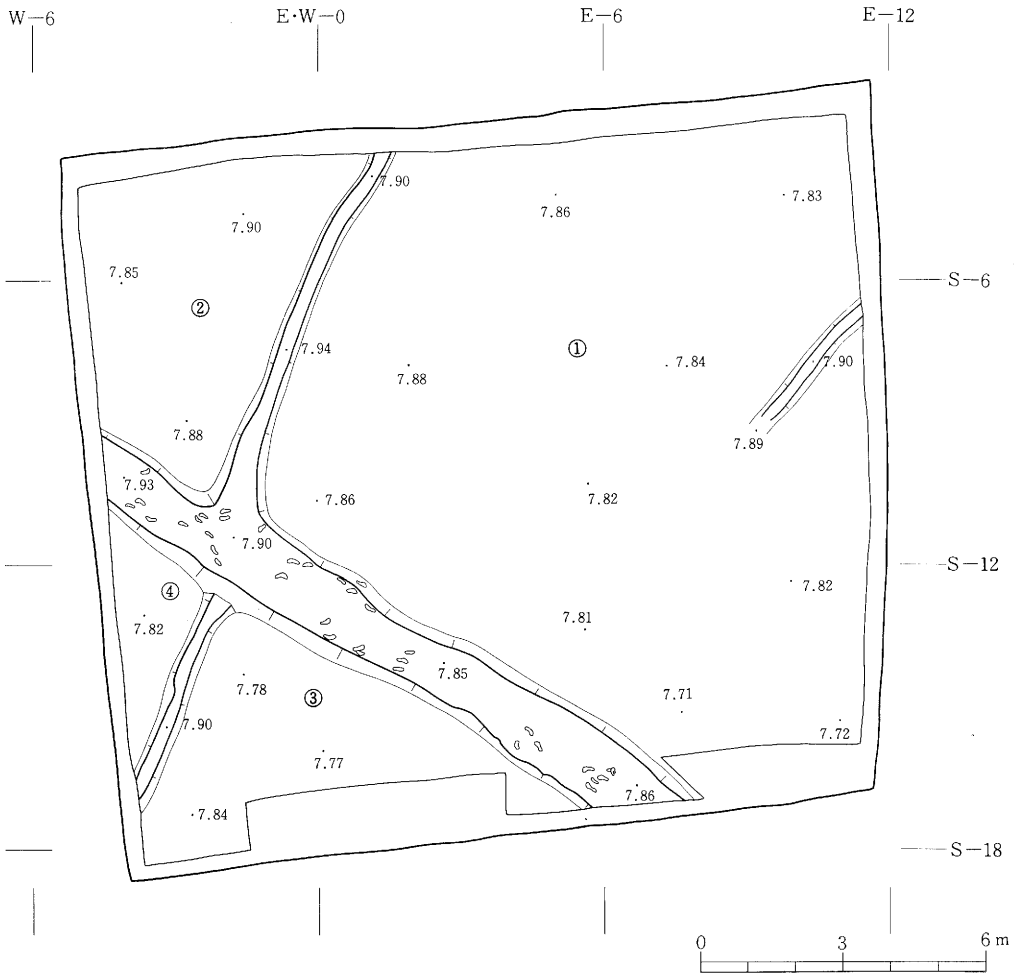
〔**畦畔の状況**〕　畦畔は、東西方向のもの1条と南北方向のもの1条が検出されている。東西方向のものは、ほぼ真東西方向であるが、大きく南側へ弯曲している。これに直交する南北方向のものは、真北よりやや西(N―5°―W)に傾いている。東西方向の畦畔から南へ延びると思われる畦畔は、N―約20°―Eの方向であると思われる。畦畔の規模は、東西方向のものは上端幅で80cm前後、下端幅で110～120cmである。南北方向のものは、上端幅で80cmであり、下端で120cmであるが、大部分盛り上がりが削平されている。

〔**遺物の出土状況**〕　17層上面、及び作土中からは遺物は出土しなかった。

(10) 19層検出水田跡

〔**水田面の状況**〕　確認された水田面は、①～④の4枚である。畦畔は作土と同じ土によって作られており、畦畔と作土を明確に区別することはできなかった。水田面の区画については、その枚数、規模ともに不明である。しかし、水田面①では、畦畔が1条確認されており、さらに区画が存在していたものと考えられる。作土上面の傾斜は、水田面②、③、④においてはほとんどみられないが、水田面①においては、南東方向に緩やかに傾斜している。その比高差は最大18cmである。水田面①の東側で、途切れている畦畔の延長ラインで傾斜が変わり、より東側で傾斜が大きくなっている。この部分で、水田面①が区画されていたことが考えられる。また、水田面①、②と③、④の間の畦畔をはさんで南側と北側では水田面のレベルが違っており、南側が一段低い水田面となっている。

〔**畦畔の状況**〕　畦畔は、東西方向のもの1条と南北方向のもの3条が検出されている。南北方向のものについては、水田面①と②の間のものと、③と④の間のものについては、水田面のレベルが南側が一段低くなっており、同一の畦畔ではなく、別の畦畔であると判断した。それぞれの方向は、東西方向のものはW―約30°―Nの方向を指し、南北方向のものは水田面①の東側の畦畔がN―39°―Eの他、西側のものはN―23°―Eと、東側のものがやや東偏している。畦畔の規模は、東西方向のものは上端幅で100～140cm、下端幅で145～200cmで南北方向のもの



第17図　19層検出水田跡

が、上端幅24～50cm、下端幅で42～75cmと、東西方向の畦畔の方が規模が大きくなっている。また高さについても、東西方向のものが、４～13cmあるのに対し、南北方向のものは数cm程度である。また、南北方向の畦畔上を中心として足跡が検出されている。その方向性については、畦畔の方向に沿っているものが多いようであり、大きさについては、20～25cm前後のものが多くなっている。

〔遺物出土状況〕　19層上面及び作土中からは遺物は出土しなかった。

Ⅴ．考察とまとめ

１．出土遺物

今回の調査で出土した遺物は、弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、瓦、金属製品、ガラス製品、木製品、石製品が出土している。ほとんどが破片資料である。最も多いのはＳＤ－２水

路より出土した陶磁器類である。各遺構、層位毎に個々の遺物については取り上げている。ここでは比較的図示資料、写真資料の多い陶磁器、土師器、弥生土器、石製品についてまとめてみたい。

(1) 陶磁器

209点出土した。秉燭１点を除いて全て破片資料である。大部分がＳＤ－２水路から出土したものである。産地の判明するものでは、肥前、唐津、瀬戸、美濃、相馬、堤等がある。肥前のものが最も多く、相馬がこれに次ぎ、これらで全体の半数近くを占めている。時代的には中世から明治以後の近代、現代のものまでが認められるが、江戸時代後期以降、明治にかけてのものが多くなっている。

(2) 土師器

38点の破片資料が出土した。そのうち坏は27点あり、図示資料は３点である。全て成形時にロクロが使用され、内面にヘラミガキと黒色処理がみられる。底部資料の切り離し技法は回転糸切りで、再調整は施されていない。これらの土師器は、その特徴から「表杉ノ入式」に属し、平安時代に位置付けられるものである。

(3) 弥生土器

29点の破片資料が出土している。13層及び15ａ・15ｂ層から出土しているが、それぞれ、同一個体の破片であると考えられる。13層出土のものは口縁部の破片であり、全体の器形は不明であるが、口唇部に縄文、頸部あるいは肩部に、２条以上の沈線文が施文されている。小破片の為、詳しい型式は不明であるが、弥生後期に属するものであると考えられる。(註１) 15層出土のものは、半截竹管状の施文具による平行沈線文（二本一描）が施文されている。文様には、山形文、直線文などが組み合せられ、体部では沈線文の文様帯の下部に、上端に綾絡文をめぐらしたＬＲ縄文が施文されている。器形は、体部が膨らみ、肩部で窄まり、頸部は内傾しながら立ちあがる、甕あるいは壺形のものであると思われる。15層出土土器に類似する資料は、山口遺跡等で出土しており、十三塚式に比定されている。(註２) 本資料も十三塚式に比定して差支えないものと思われる。

(4) 石製品

石製品には、砥石と礫石器等がある。砥石は２点出土している。ＳＤ－２溝跡、８層水田より出土している。ＳＤ－２溝跡出土のものは完形であるが、８層出土のものは破片である。礫石器は９点出土している。ＳＤ－２溝跡より６点、12層より２点、13層より１点出土している。全面及び一面に磨痕が観察される。大きさ、形態、使用形態については、規則性や統一性はみられなかった。その他に15ａ層より磨製石斧の基部と思われる石器、15ｂ層から石包丁の破片と考えられる擦痕のある石器片も出土している。

2．検出遺構

今回の調査で検出された遺構は、溝跡２条、水田跡７面である。このうち本項では、ＳＤ－２溝跡と水田跡について取り上げる。

(1) ＳＤ－２溝跡

ＳＤ－２溝跡は掘り込まれた年代は不明であるが、区画整理の盛土以前まで機能していた水路である。調査区内では、上幅は2.7～5.4m であったが、水路として水が流れていた部分は幅１m 程度であったと思われ、前述の上幅の範囲内で流路を変えながら蛇行していたものと考えられる。

この水路を境に、字名が、東側は「宮田」、西側は「鳥居原」ということから、字境いの役割も果たしていたことが知られる。これらの地名は、どの時代まで遡ることができるか、明らかではないが、出土遺物から江戸時代後半からは機能していた可能性がある。また、堆積土中から瓦片も出土しており、それ程離れていない場所に瓦葺きの建物が存在していたことが考えられる。

(2) 水田跡

水田跡は、５層、８層、10層、15ａ層、15ｂ層、17層、19層の７面で検出されている。各々の概要と富沢遺跡における位置付けを考えることにする。

５層検出水田跡　作土中の灰白色火山灰の混入の状況によって、畦畔の痕跡が確認されたのみであるが、本来、８層上面に存在した灰白色火山灰を耕作の際にまき込んだものであると考えられる。このことから、畦畔は作土と同じ土で作られているが、耕作の際には畦畔の部分をよけて作業しているものと考えられる。この水田跡の年代は出土遺物の点から明確にはできないが、直下層上面の灰白色火山灰をまき込むということから、平安時代以降のものであると考えられる。

８層検出水田跡　上面に灰白色火山灰が乗る部分があり、出土遺物からみても、平安時代に位置付けられる。水田の区画については調査区が狭いということもあり、明確にすることはできなかった。しかし、南北方向の畦畔の方向は約20°東に偏している。また、畦畔の交点に関しては、調査区内では「Ｙ」あるいは「Ｔ」字状になる。標高はおよそ8.68～8.60m である。

10層検出水田跡　水田区画、畦畔の方向など、８層検出水田跡と共通点がいくつか認められる。特に北側の畦畔と東側の畦畔は８層のものと、ほとんど重なっている状態であり、畦畔の交点に関しても「Ｙ」あるいは「Ｔ」字状になっている。しかし、東側の畦畔に８層にない畦畔がとり付き、南側の畦畔もみられない。また、北側の畦には南側に畦畔がとりつく痕跡があり、８層の区画より小さい区画になるものと思われる。標高は8.57～8.52m である。

15ａ層検出水田跡　調査区内では畦畔が３条検出されている。「Ｙ」字状に交差しており、

交点の南側に水口が検出されている。水田区画については不明であるが、下層の15ｂ層検出水田と極めて類似した土壌であり、大きな時間差が下層の水田との間に存在するとは考えにくい。また、本来下層中に存在したと考えられる遺物をまき込んでいるということからも、時間的な隔たりは少ないものと思われる。標高は8.30～8.17mである。

15ｂ層検出水田跡　当水田跡は、出土した弥生土器から、弥生時代後期の十三塚式期に位置付けられる。水田の区画は、かなり規則的なもので、調査区内で８枚の水田面が検出されており、ほぼ一区画が判明するもので、南北７～８ｍ、東西約８ｍの方形の区画となっている。面積は56～64㎡程度である。標高は8.25～8.06mであり、特に南東方向に傾斜している。

17層検出水田跡　調査区内では２条の畦畔が検出されている。「Ｔ」字状に交差している。水田区画については不明であり、出土遺物がなく時期を特定することも困難である。標高は8.08～7.94mであり、南東部分が凹み状に下がっている。

19層検出水田跡　当水田跡は、上幅100～140cmの大畦と上幅20～50cmの小畦によって区画された水田跡と考えられる。大畦の方向はＷ－30°－Ｎと真北に対して60°西偏している。標高は約7.89～7.71mであり、南東隅付近が最も低い。

以上が検出された水田跡の概要である。

本調査区は富沢遺跡の東部に位置しており、これまでほとんど調査の行なわれていない地区である。わずかに、南西約100mの地点で、第32次調査が約90㎡の面積で行なわれているのみである。第32次調査では、灰白色火山灰層が含まれる層が２層確認され、それらの直下の層で畦畔が１条検出されている。上部の灰白色火山灰が含まれる層は、本調査区の５層、８層に対応するものと考えられる。(註３) 平安時代の水田跡が３層にわたって検出され、他の地区においても平安時代の水田面は灰白色火山灰が乗る層をはさんで３層検出されており、東部においても同様の状況であることが確認された。しかし、水田区画については不明な点が多い。奈良時代～古墳時代の水田跡については、本調査区において検出されず、東部では不明である。弥生時代の水田跡については、今回の調査で、東部においては４層の水田が検出された。15ａ層、15ｂ層のものは十三塚式期の水田跡と考えられ、富沢遺跡内でも明確な水田区画が検出されたのは第15次調査時に検出されているのみであり、他の地点では対応する土層は確認されているが、水田区画は検出されていない。また、十三塚式期の水田が２層検出されたのは初めての成果であるが、第15次調査検出の水田跡との対応関係は、畦畔の方向が類似していることから、15ｂ層水田跡が対応するものであると思われる。(註４) 17層及び19層検出水田跡については、出土遺物がなく時期は明らかではないが、19層水田跡は畦畔の構成、土層の状況から桝形囲式期のものであると考えられ、17層水田跡は、十三塚式期以前、桝形囲式期以降の時期と考えられる。

3．まとめ

(1)　本調査区は富沢遺跡の東部に位置している。

(2)　検出遺構には、近世以降の水路１条、平安時代及び平安時代以降の水田跡３層、平安時代の溝跡１条、弥生時代の水田跡４層がある。

(3)　弥生時代の水田跡は、十三塚式期のもの２層、十三塚式期～桝形囲式期のもの、桝形囲式期のもの各１層である。

註

1．太田昭夫氏の御教示による。

2．佐藤甲二他：『山口遺跡Ⅱ』仙台市文化財調査報告書第61集（1984．２）

3．調査担当者との検討による。報告書は昭和63年３月刊行予定である。

4．斎野裕彦他：『富沢―富沢遺跡第15次調査報告書』仙台市文化財調査報告書第98集（1987．３）

第３表　出土遺物破片集計表（図示遺物は除く）

| 種別 | 肥前 | | |

第４表　写真図版遺物観察表

写真図版	遺構、層位	種類	器　種	外　　面	内　　面	産　地	年　　代
10－１	ＳＤ－2、4層	磁器	碗	染付(梅樹文)	――――	肥前	江戸
－２	ＳＤ－2	磁器	碗	染付	染付	肥前	18Ｃ～幕末
－３	ＳＤ－2、3層	磁器	皿	染付	染付(唐津文)	肥前	18Ｃ前半
－４	ＳＤ－2、3層	磁器	皿	染付	染付	肥前	18Ｃ以後
－５	ＳＤ－2、4層	磁器	皿？	染付	染付	肥前	18Ｃ～
－６	ＳＤ－1	磁器	？	染付	――――	肥前	18Ｃ～
－７	ＳＤ－2、3層	磁器	皿	――――	染付(見込み蛇ノ目釉はぎ)	肥前	18Ｃ
12－１	ＳＤ－2、4層	磁器	皿	――――	染付	肥前	江戸
－２	ＳＤ－2、5層	磁器	皿	白磁？	――――	肥前	江戸
－３	ＳＤ－2、5層	磁器	碗	染付(網目文)	染付(網目文)	肥前	江戸
－４	ＳＤ－2、5層	磁器	碗	染付	――――	肥前	18Ｃ
－５	ＳＤ－1	磁器	碗	――――	染付	肥前	18Ｃ
－６	ＳＤ－1	磁器	小碗	染付	――――	肥前	18Ｃ
－７	2～3層	磁器	碗	染付(丸文)	染付	肥前	18Ｃ
－８	2～3層	磁器	碗	染付	――――	肥前	18Ｃ
14－１	ＳＤ－1、2層	陶器	壺or甕	――――	――――	唐津	18Ｃ以後～幕末
－２	ＳＤ－2、1層	陶器	皿	灰釉	鉄絵灰釉	唐津	18Ｃ
－３	ＳＤ－2、1層	陶器	大鉢	――――	――――	唐津	18Ｃ
－４	ＳＤ－2、1層	陶器	壺？	灰釉	灰釉	唐津	18Ｃ
－５	ＳＤ－2、1層	陶器	皿	灰釉	青釉	唐津	18Ｃ
－６	ＳＤ－2	陶器	大鉢	釉	釉	瀬戸or美濃	
－７	ＳＤ－2	陶器	大鉢or甕	釉	釉	瀬戸or美濃	
16－１	ＳＤ－2、3層	陶器	碗	灰釉	灰釉	九州地方	18Ｃ？
－２	2～3層	陶器	碗	灰釉系	灰釉系	九州地方	18Ｃ
－３	2～3層	陶器	端反皿	灰釉	灰釉	九州地方	18Ｃ～
－４	ＳＤ－2、2層	陶器	皿	灰釉	灰釉	九州地方	18Ｃ？
－５	ＳＤ－2、3層	陶器	碗	灰釉系	灰釉系	九州地方	18Ｃ？
－６	ＳＤ－2、3層	陶器	碗	灰釉	灰釉	九州地方	18Ｃ？
－７	ＳＤ－2、5層	陶器	碗	灰釉系	灰釉系	九州地方	18Ｃ
－８	ＳＤ－1	陶器	碗	灰釉	灰釉	九州地方	18Ｃ
－９	ＳＤ－2、3層	陶器	碗	灰釉	灰釉	九州地方	18Ｃ？
18－１	ＳＤ－2、4層	陶器	天目茶碗	鉄釉	鉄釉	瀬戸	江戸初期以前
－２	ＳＤ－2、2層	陶器	壺	灰釉、篦描き文字？	――――	瀬戸	中世(14Ｃ以降)
－３	ＳＤ－2、3層	陶器	壺の耳	鉄釉	鉄釉	瀬戸	中世？
－４	2～3層	陶器	甕	――――	――――	県内産	中世
－５	ＳＤ－2、4層	磁器	皿	白磁	白磁	東北	江戸
－６	ＳＤ－2、4層	磁器	急須注口	染付	――――	会津平清水	江戸
20－１	ＳＤ－2、4層	陶器	徳利	――――	――――	相馬	幕末？
－２	ＳＤ－2、4層	陶器	土瓶	――――	――――	相馬	
－３	ＳＤ－1、2層	陶器	土瓶	――――	――――	相馬	幕末～
－４	ＳＤ－2、4層	陶器	碗	灰釉	灰釉	相馬	19Ｃ
－５	2～3層	陶器	皿or蓋	灰釉	灰釉	相馬	幕末～明治
－６	ＳＤ－2、5層	陶器	碗	灰釉	灰釉	相馬	幕末～明治
22－１	ＳＤ－2、4層	陶器	鉢	なまこ釉	なまこ釉	提	江戸？
－２	ＳＤ－2、4層	陶器	小甕？	鉄釉	鉄釉	提	江戸

写真１　８層検出水田
（北→南）

写真２　10層検出水田跡
（北→南）

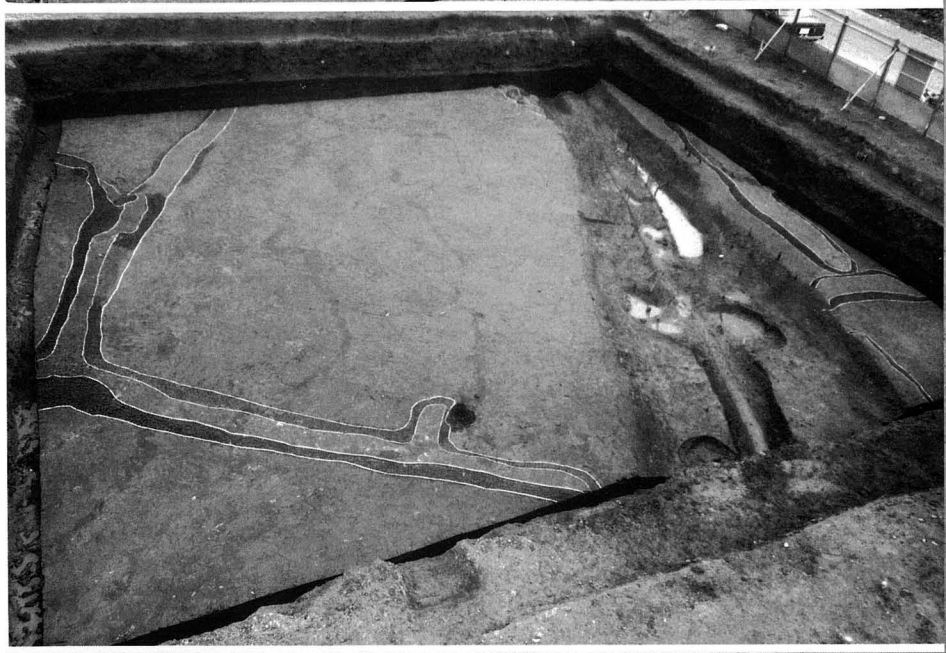


写真３　ＳＤ３溝跡
（西→東）

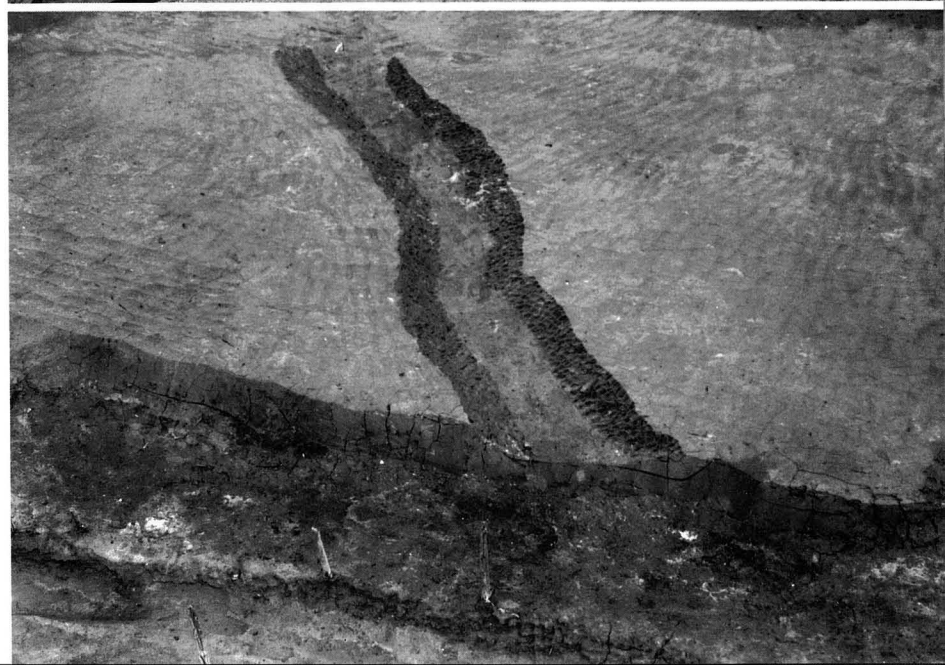


写真４　15ａ層検出水田跡
（北→南）

写真５　15ｂ層検出水田跡
（北→南）

写真６　17層検出水田跡
（東→西）

写真７　19層検出水田跡
（北西→南東）

写真８　19層検出畦畔上の足跡
（西→東）

写真９　北壁土層断面
（南→北）

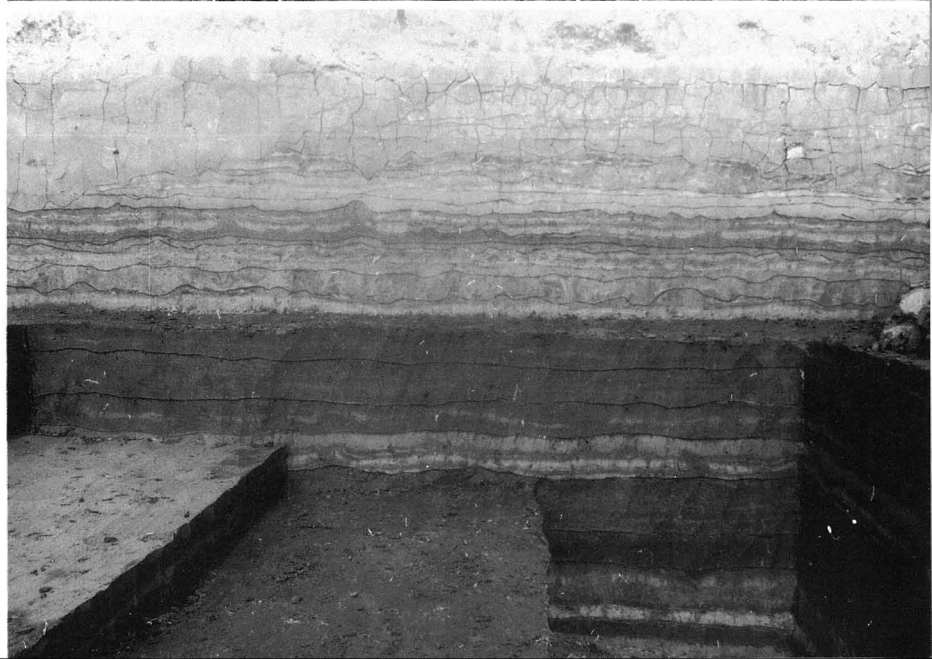


写真10　出土遺物1
肥前（外面）

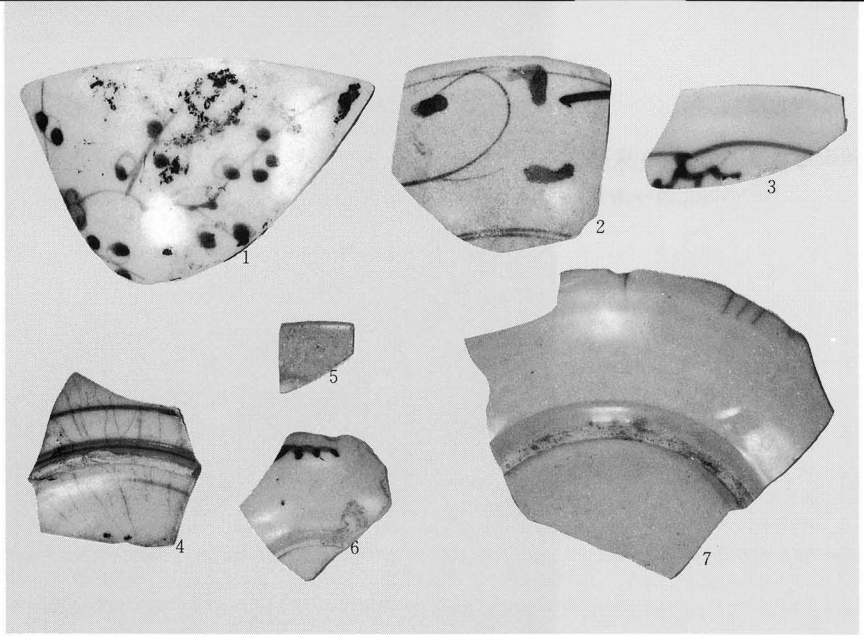


写真12　出土遺物2
肥前（外面）

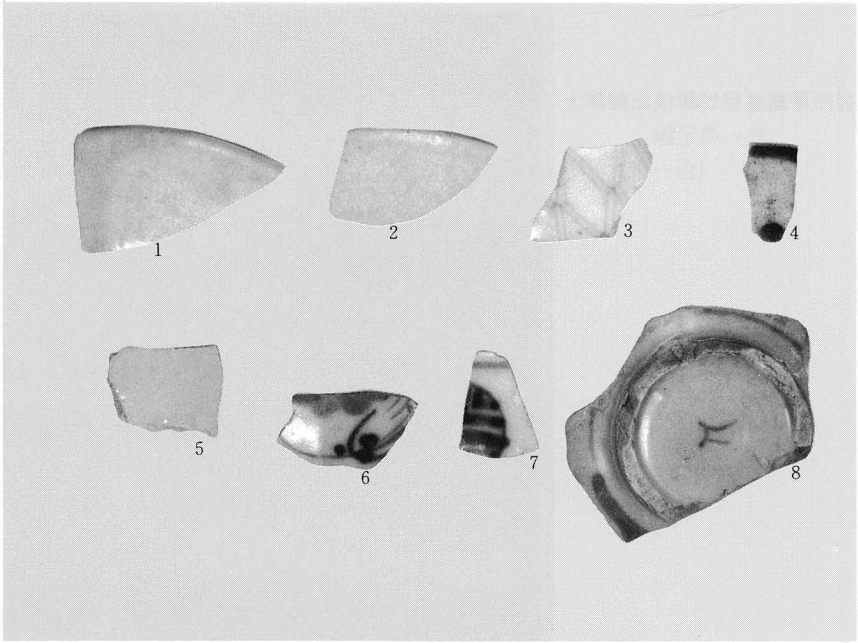
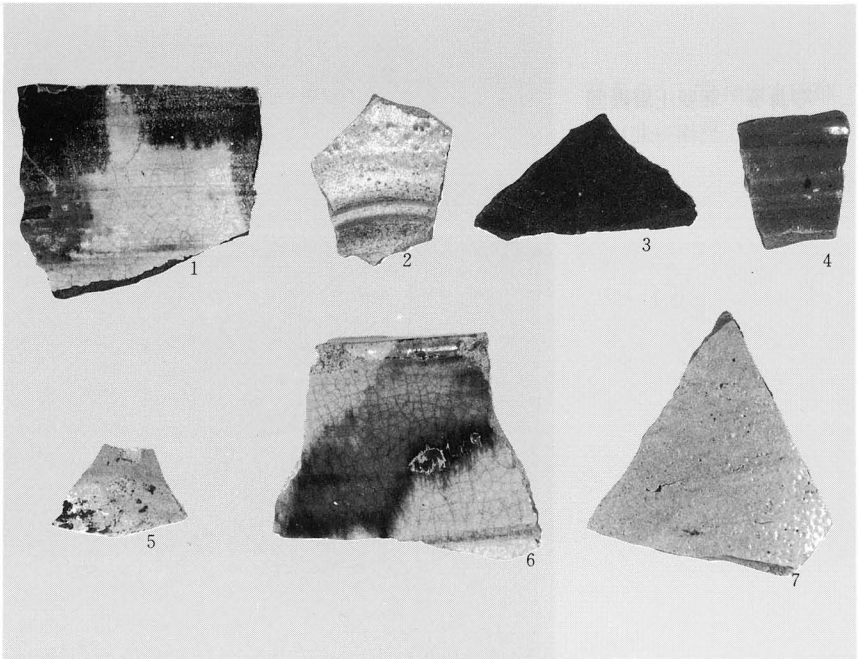


写真14　出土遺物3
唐津
瀬戸・美濃
（外面）



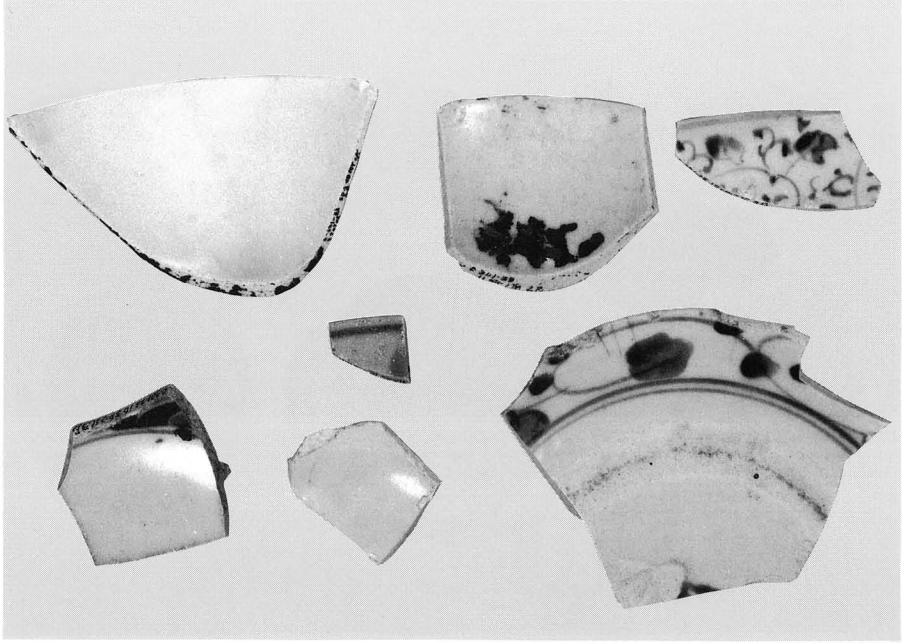


写真11　出土遺物１
肥前（内面）

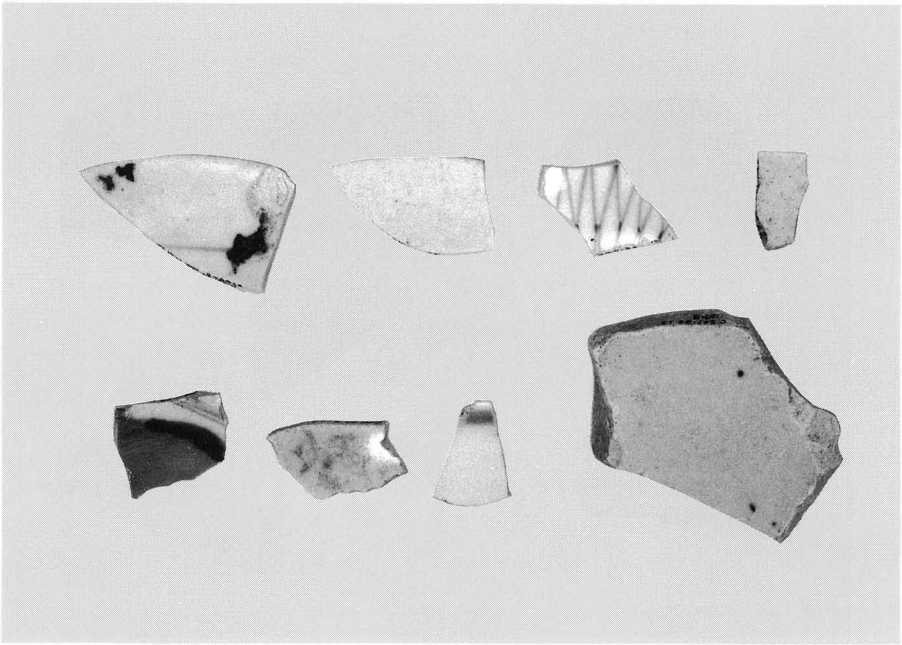


写真13　出土遺物２
肥前（内面）

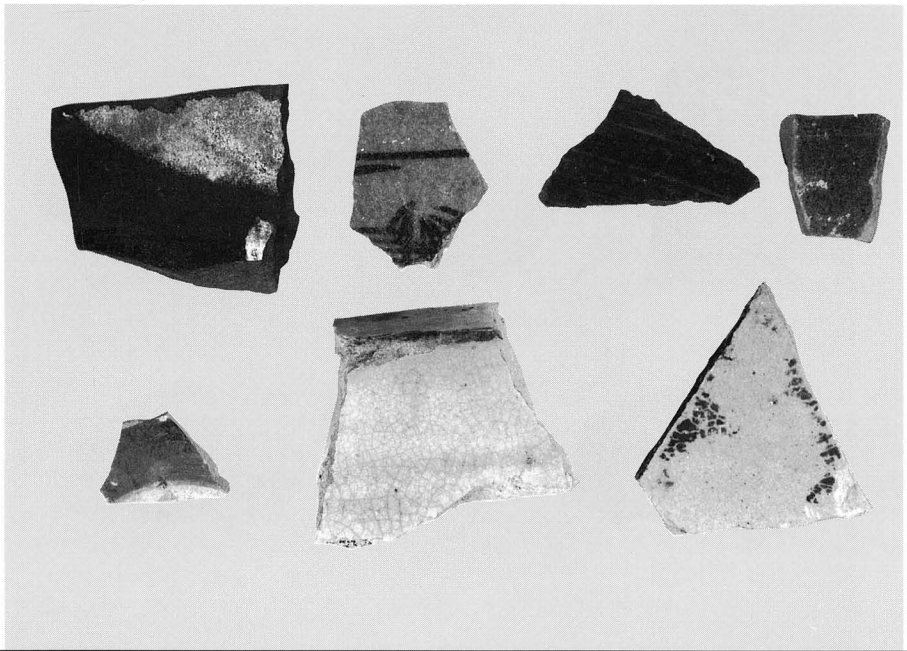


写真15　出土遺物３
唐津
瀬戸・美濃（内面）

写真16　出土遺物 4
九州産（外面）

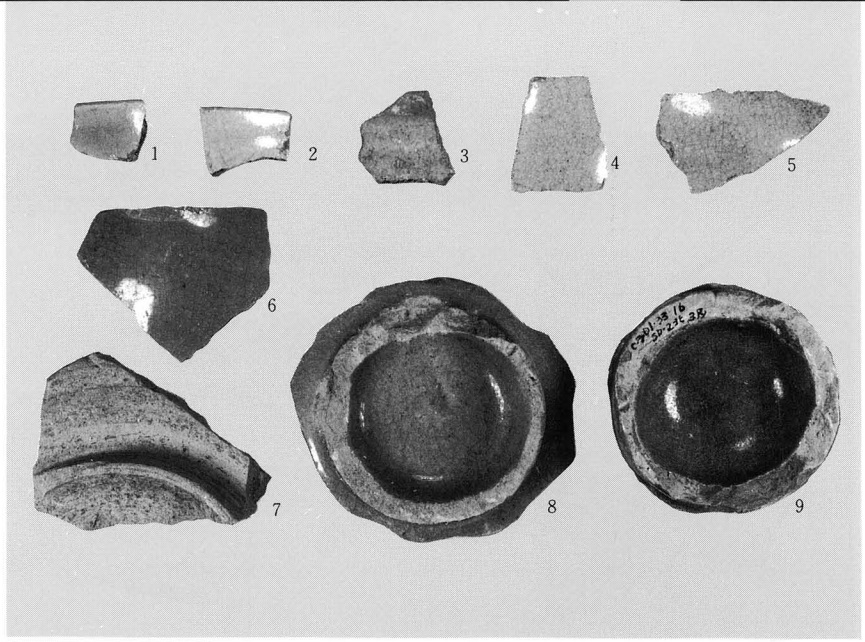


写真18　出土遺物 5
瀬戸
東北産（外面）

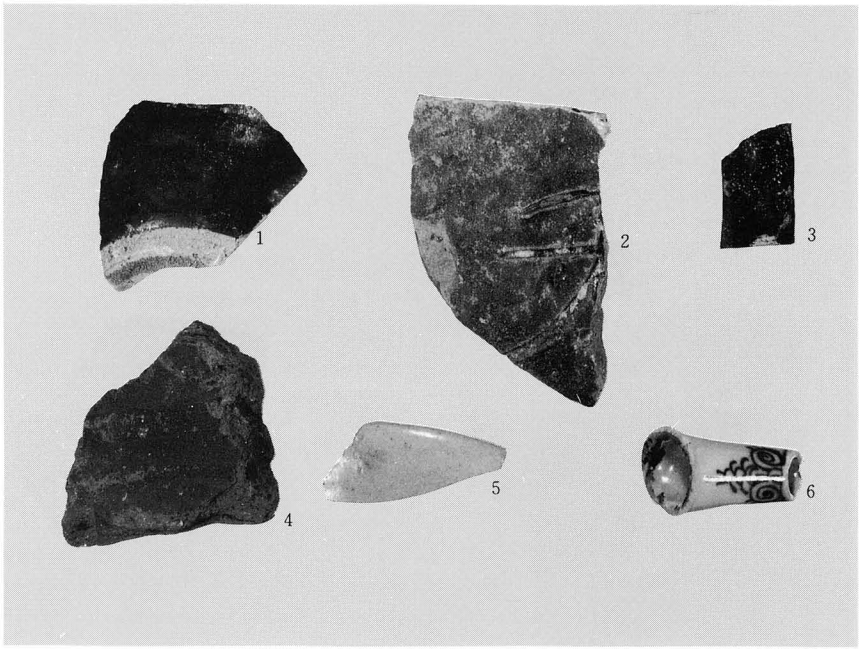
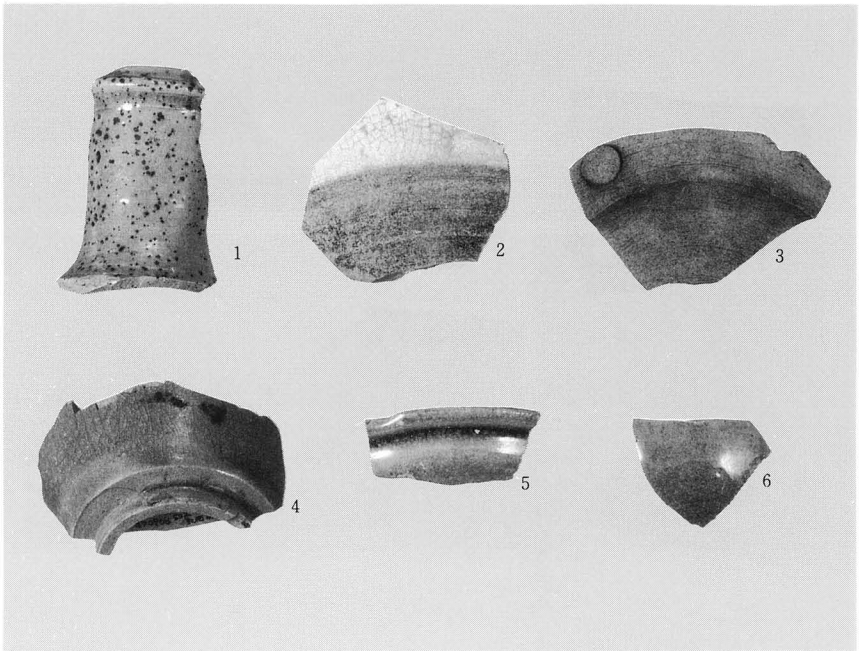


写真20　出土遺物 6
相馬（外面）



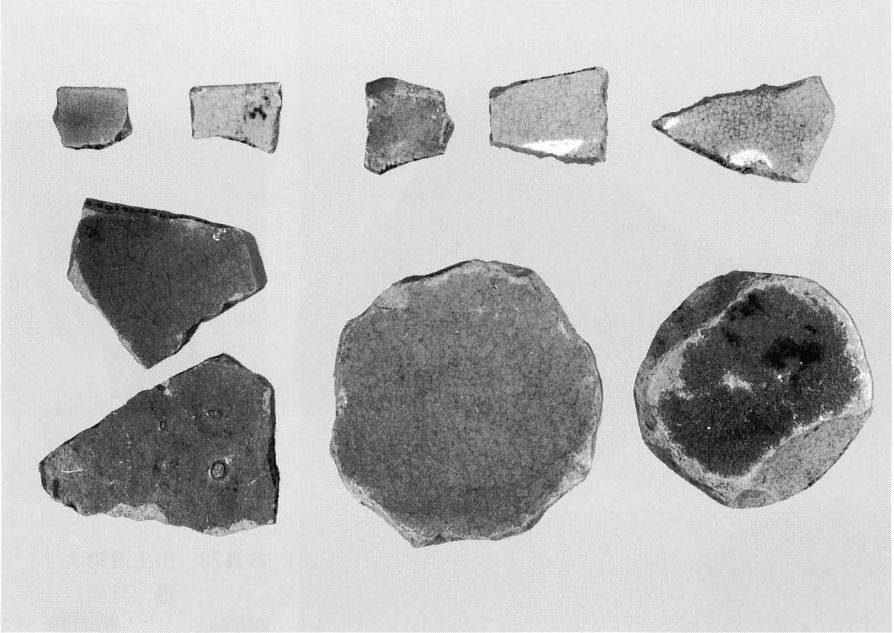


写真17　出土遺物４
九州産（内面）

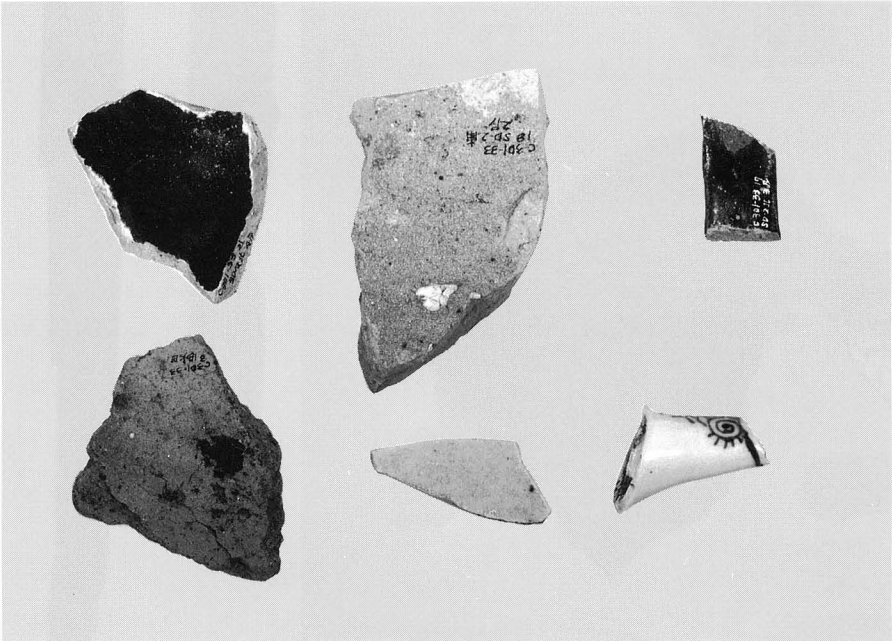


写真19　出土遺物５
瀬戸
東北産（内面）

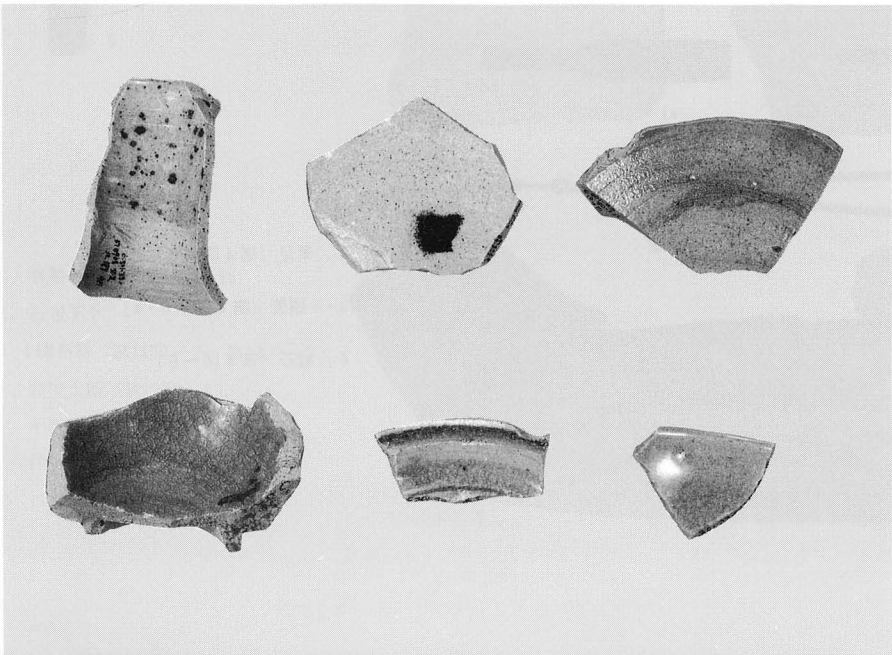
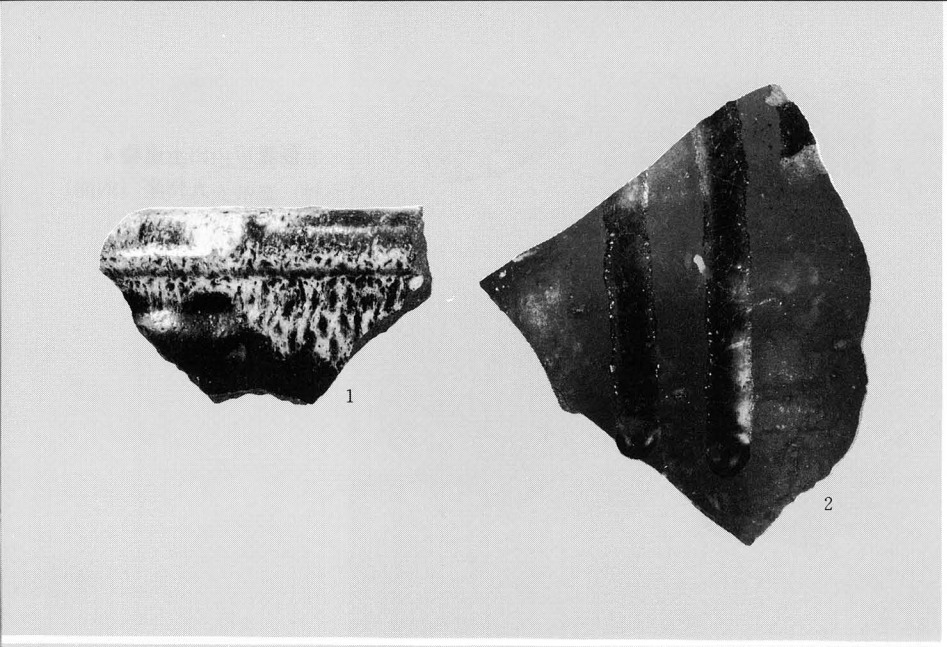


写真21　出土遺物６
相馬（内面）



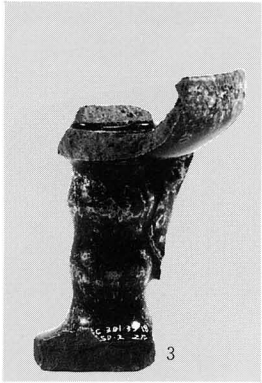


写真22　出土遺物７
堤（外面）

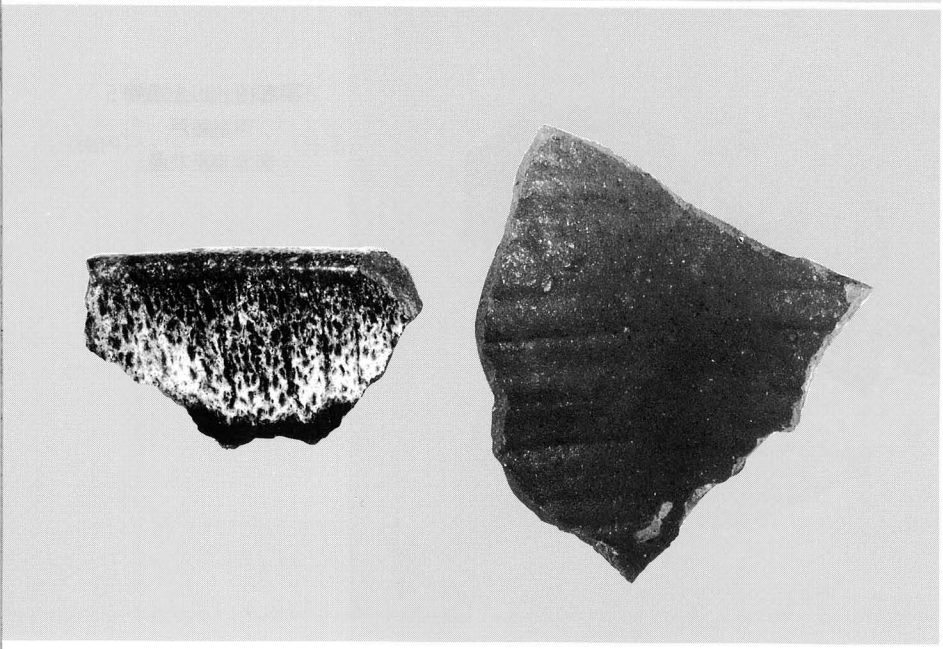


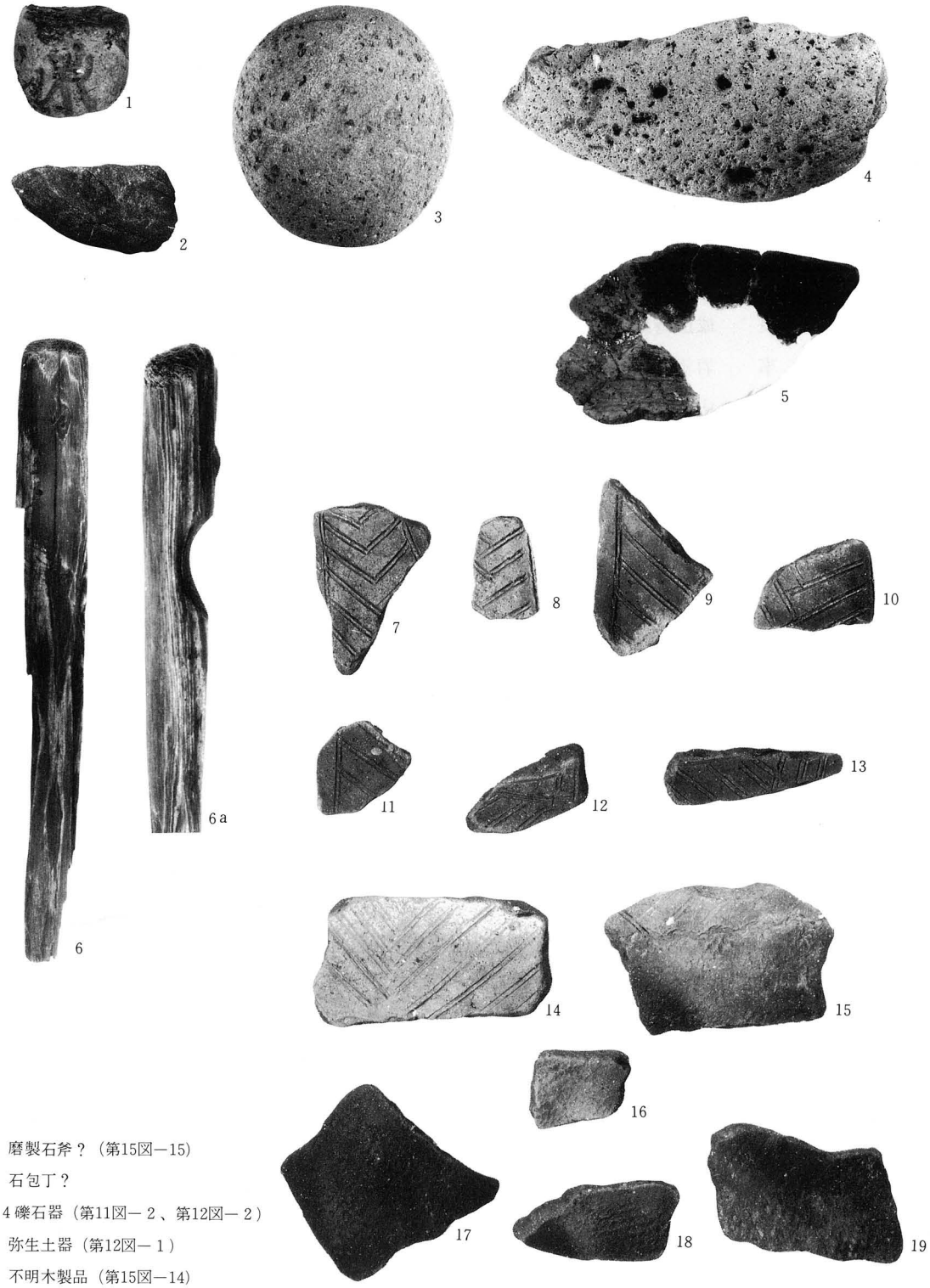
写真23　出土遺物７
堤（内面）

３．秉足（第４図－１）

４・５煙管（第４図－３・４）

６．砥石（第４図－６）

写真24　出土遺物８



1．磨製石斧？（第15図－15）
2．石包丁？
3・4 礫石器（第11図－２、第12図－２）
5．弥生土器（第12図－１）
6．不明木製品（第15図－14）
7～19．弥生土器（第15図－１～13）

写真25　出土遺物９

職　員　録

文化財課		調査係		調査係	
課長	早坂春一	係長	佐藤　隆	主事	佐藤　良文
		主事	結城慎一	〃	長島　榮一
管理係		〃	木村浩二	教諭	千葉　仁
係長	成田時雄	〃	篠原信彦	〃	松本　清一
主事	岩沢克輔	教諭	太田昭夫	主事	及川　格
〃	山口　宏	主事	佐藤　洋	〃	中富　洋
〃	白幡靖子	〃	金森安孝	〃	平間　亮輔
		〃	佐藤甲二	教諭	渡辺　広二
		〃	吉岡恭平	主事	宮崎　明
		教諭	小川淳一	〃	佐藤　淳
		主事	工藤哲司	〃	松本　素明
		〃	渡部弘美	〃	渡部　紀
		教諭	橋本光一	〃	大江美智代
		主事	主浜光朗	〃（併任）	工藤信一郎
		〃	斉野裕彦		

仙台市文化財調査報告書第117集
富　沢　遺　跡
―― 第33次発掘調査報告書 ――
昭和63年3月
発行　仙台市教育委員会
仙台市国分町3－7－1
仙台市教育委員会文化財課
印刷　株式会社　共新精版印刷
仙台市日の出町2－4－2
TEL　236－7181